

椋ノ木遺跡（第2次）発掘調査報告

—三重郡菰野町—

2019（令和元）年9月

三重県埋蔵文化財センター



調査区全景（東から）



SH 1（北から）



S H12遺物出土状況（東から）



出土遺物（報告番号21）

序

平成20年2月の新名神高速道路（亀山JCT～草津田上IC）の開通により、接続する東名阪自動車道の交通量が増加し、一部区間で付加車線を設置するなど渋滞緩和が図られました。

しかし、渋滞解消には至らず新名神高速道路の三重県内区間の全線開通が急がれ、平成最後となる本年3月にようやく供用が開始されました。

これにより、東名阪自動車道の慢性的な渋滞が解消され、物流や観光振興だけでなく、南海トラフ地震発生時の防災力の強化など、多方面への好影響が期待されているところです。

一方で、開発により、やむなく破壊される遺跡の存在を忘れてはなりません。三重県埋蔵文化財センターでは、開発により現状保存が困難な遺跡を発掘調査し、そこに眠る埋蔵文化財を明らかにし、その記録を報告書としてまとめ、後世に伝える努力をしています。

ここに報告します椋ノ木遺跡は、聖徳太子が活躍した飛鳥時代の遺跡です。新名神高速道路建設に伴う緊急発掘調査により、カマドを持つ竪穴住居などを確認し、当時の人々の生活の様子を新たに知ることができました。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたり、地元自治会をはじめとした地域の皆様、中日本高速道路株式会社、菰野町教育委員会など関係諸機関からご理解とご協力を賜りましたことに、心からのお礼を申しあげます。

令和元年9月

三重県埋蔵文化財センター

所長 上村安生

例　　言

- 1 本書は、三重県三重郡菰野町大字池底及び大字潤田に所在する椋ノ木遺跡（第2次）の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 4 発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV・V』の2冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
- 5 調査は下記の体制で実施した。
 - ・ 委託者 中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
 - ・ 受託者 三重県教育委員会
 - ・ 調査主体 三重県教育委員会
 - ・ 調査担当 三重県埋蔵文化財センターなお、詳細については『I 前言』に記載したとおりである。
- 6 本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員が行い、文責については目次及び文末に記載した。遺物の写真撮影は荻原義彦が行い、編集は泉賢治・荻原義彦が行った。
- 7 本書で示す方位は、世界測地系第VI座標による座標北である。
- 8 本書で表記する土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖（第34版）』（日本色研事業株式会社 1967年初版）に掲った。
- 9 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1：25,000の地形図「御在所山」「四日市西部」「菰野」「伊船」、三重県共有デジタル地図Ⅷ平成19年測図）を用いた。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合組合の承認を得て使用した。（承認番号：平成31年4月3日付三総合地第1号）
- 10 発掘調査に際しては、地元の方々をはじめ、菰野町教育委員会、菰野町池底自治会、菰野町潤田自治会のご協力をいただいた（順不同、敬称略）。
- 11 本書で用いた遺構表示略号は、以下の通りである。
S H : 竪穴住居 S K : 土坑 S D : 溝 S Z : 不明遺構
- 12 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

I	前言	(服部芳人)	1
1	調査に至る経緯		1
2	調査の経過		1
II	位置と環境	(泉 賢治)	4
1	地理的環境		4
2	歴史的環境		4
III	層序と遺構	(泉 賢治)	9
1	層序		9
2	遺構		12
IV	遺物	(萩原義彦)	20
1	弥生時代		20
2	飛鳥時代		20
3	鎌倉時代から江戸時代		21
V	自然科学分析	(株式会社パレオ・ラボ)	26
1	はじめに		26
2	試料と方法		26
3	結果		26
4	考察		26
VI	結語	(萩原義彦)	29
1	堅穴住居		29
2	「×」記号のある土師器甕		29
3	小結		33

卷頭図版

卷頭図版1 調査区全景（東から）
SH1（北から）

卷頭図版2 SH12遺物出土状況（東から）
出土遺物（報告番号21）

図版目次

第1図	遺跡位置図	7
第2図	遺跡地形図	8
第3図	調査区位置図	8
第4図	下層調査のトレーン配置と 土層柱状図	9
第5図	遺構平面図	10
第6図	調査区上層断面図	11
第7図	SH1・カマド・突出部実測図	13
第8図	SH10・カマド実測図	14
第9図	SH12・カマド実測図、 遺物出土状況図	15

第10図	SH16・カマド実測図、 遺物出土状況図	16
第11図	SH19・カマド実測図、 SK25遺物出土状況図	17
第12図	S K22実測図	18
第13図	出土遺物実測図（1）	22
第14図	出土遺物実測図（2）	23
第15図	暦年較正結果	28
第16図	棕ノ木遺跡周辺地形図	30
第17図	「×」記号のある 土師器甕・平底鉢	31

表目次

第1表	遺構一覧表	19
第2表	竪穴住居一覧表	19
第3表	遺物観察表（1）	24
第4表	遺物観察表（2）	25
第5表	測定資料および処理	27

第6表	放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果	28
第7表	「×」記号のある 土師器甕・平底鉢出土遺跡一覧表	34

写真目次

写真1	現地説明会風景	3
写真2	現地説明会風景	3

写真3	遺跡遠景	6
-----	------	---

写真図版目次

写真図版	調査区全景（北から）	35
写真図版1	調査区全景（南から）	36
	調査区全景（東から）	36
写真図版2	調査区全景（真上から）	37
	竪穴住居群（東から）	37
写真図版3	SH1（北から）	38
	SH1突出部遺物出土状況 (南から)	38
写真図版4	SH1カマド（北から）	39
	SH1カマド遺物出土状況 (北から)	39
写真図版5	SH10（東から）	40
	SH10カマド（東から）	40

写真図版6	SH12（東から）	41
	SH12カマド（東から）	41
写真図版7	SH16（南から）	42
	SH16カマド（南から）	42
写真図版8	SH19（西から）	43
	SH19カマド（西から）	43
写真図版9	SH25遺物出土状況（西から）	44
	SD4（西から）	44
	SD4（北から）	44
	SD21・SD23（東から）	44
写真図版10	出土遺物（1）	45
写真図版11	出土遺物（2）	46
写真図版12	出土遺物（3）	47

I 前 言

1 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書^①には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

【註】

- ①三重県埋蔵文化財センター『伊坂黒跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』（2011年）

2 調査の経過

（1）調査経過の概要

椋ノ木遺跡は、海蔵川の中流南岸に位置し、三重郡菰野町大字池底及び潤田に所在する遺跡である。

慶安3（1650）年の大洪水で、池底付近の海蔵川の南岸がほとんど流出したため、万治2（1659）年、北岸の丘陵地に移転したと言われている。地名の由来は、湿地帯のため海蔵川の氾濫で池の底のようになったことに因むとの口伝もある。

また、当遺跡からは、中世から近世の陶磁器類の遺物の散布が見られ、かつては五輪塔も確認されていたということで、菰野町の遺跡番号135として中世から近世にかけての包蔵地に登録されていた。

遺跡全体の面積は、約27,000m²であるが、今回そ

のほぼ中央を東西方向に横断する形で、新名神高速道路が計画された。

計画路線内には、宅地や畠地があり、二次調査の必要の有無確認のための一次調査は、平成25年度と平成26年度の2か年にわたり、二次調査は平成26年に実施した。以下に、その概要を記述する。

平成25年度

前年度末の協議で、調査対象範囲のほぼ中央に宅地（未買収地）があるため、それ以外の場所で、1,000m²の一次調査を10月から年内で実施する計画が立てられた。

平成25年の秋に、用地買収状況の確認協議を行い、概ね計画どおり、一次調査を実施することとなった。11月から、宅地以外の場所に幅2mの調査坑を17本設定し、合計930m²の調査を実施した。調査の結果、宅地の南西側で土師器や須恵器の遺物を確認するとともに、堅穴住居と思われる遺構が検出された。また、宅地の東側や西側では、土師器片や山茶椀片などの遺物を確認したが、顯著な遺構は検出されなかつた。そのため、遺構、遺物が確認された範囲について、二次調査が必要と判断して、次年度の発掘調査の対象とすることになった。

平成26年度

年度が改まり、用地買収状況の確認の協議を行つた。その結果、宅地の北側で、未調査範囲の半分程度であるが、発掘調査が出来る条件が整つたため、一次調査を実施した。幅2mの調査坑を4本設定し、合計174m²の調査を実施した。調査の結果、遺物としては、須恵器片や山茶椀片の他、近現代の陶器類の破片を確認したが、近現代の溝状の落ち込みと擾乱を検出したに止まり、二次調査の必要はなしと判断した。

10月から翌年1月にかけて、昨年度二次調査が必要と判断した範囲についての発掘調査を実施した。調査の結果、7世紀中ごろの堅穴住居5棟と土坑、鎌倉から室町時代の土坑、江戸時代以降の溝を複数確認した。また、遺物としては、その当時の須恵器や土師器が多く出土し、遺構は確認できなかつたが、

弥生時代中期の土器も出土した。なお、普及啓発活動の一環として、現地説明会を12月14日(日)に行い、124名の参加があった。

未買収であった宅地部分が、年末にようやく解決をした。工事の工程と発掘調査の調整協議を行い、年度内に労務提供で、一次調査を実施することとなつた。3月上旬、幅2mの調査坑を4本設定し、合計186m²の一次調査を実施した。調査の結果、いずれの調査坑でも遺構、遺物は確認されず、二次調査の必要はなしと判断した。

(2) 調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成25年度

・一次調査

担当：松永公喜（調査研究3課）

業者：株式会社西武緑化（土工委託）

期間：平成25年11月8日～平成26年1月6日

面積：930m²

平成26年度

・一次調査

担当：服部労人（調査研究3課）

業者：ネクスコ中日本（労務提供）

期間：平成26年6月18日～平成26年6月19日

面積：174m²

平成26年度

・第2次調査

担当：山中由紀子・鈴木規之（調査研究3課）

業者：株式会社西武緑化（土工委託）

期間：平成26年10月16日～平成27年1月13日

面積：791m²

・一次調査

担当：鈴木規之・矢田陽（調査研究3課）

業者：ネクスコ中日本（労委提供）

期間：平成27年3月10日～平成27年3月11日

面積：186m²

（調査日誌抄）

平成26年（第2次調査）

10月27日 調査区設定

10月30日 表土掘削開始

S H 1 で焼土・土器片確認

11月 5日	調査区南壁写真撮影・土層図作成着手
11月 6日	S H 19で煙道付きカマド確認 カマド内から土師器・須恵器出土
11月 7日	S H 10から土師器片出土
11月14日	作業員作業開始 当初2棟の重複を想定していたS H 1について一辺6mの1棟と判断する 遺構カードの作成開始
11月17日	S H 1で畦を設定 遺構掘削開始
11月18日	S H 1の南側でカマド検出 北側の突出部から土師器壺片出土
11月19日	S H 1の北側で土師器長胴壺片出土
11月20日	S H 10掘削開始 北西隅でカマド検出 S H 10と重複するS H 16を確認
11月21日	S H 1 土層図作成 S H 12南半部掘削開始
11月27日	S H 1 土層観察畦撤去 S H 10主柱穴掘削 カマド掘削開始 S H 12南半部完掘 中央付近で硬化部確認 S H 16とS H 19の切り合いを確認
11月28日	S H 1 突出部の土器出土状況写真撮影と 図作成・土器取り上げ S H 10カマド精査 S H 12北半部掘削開始 S H 19掘削開始
12月 2日	S H 1 カマド・煙道掘削 S H 10土層写真撮影・図作成 S H 12・S K 11と接する西辺で焼土確認 土器集中出土 S H 19カマド範囲確認 S K 22土層写真撮影・図作成
12月 3日	S H 1 カマド断ち割り S H 10畦撤去・カマド掘削 S H 12主柱穴4か所確認・カマド掘削 S H 16土層写真撮影 S H 19主柱穴精査（北西部のみ検出）
12月 5日	S H 1 カマド部掘削 焼土の下から土器 出土

- S H10カマド掘削
 S H16須恵器杯(完形)出土 土層図作成
 S H12土層写真撮影・図作成
- 12月 8日 S H12土器出土状況撮影・図作成・土器取り上げ
 空中写真撮影のための清掃
- 12月 9日 空中写真撮影・タワー写真撮影
- 12月 10日 タワー写真撮影
- 12月 12日 図面(1/20)作成
- 12月 14日 現地説明会(参加者124名)



写真1 現地説明会風景



写真2 現地説明会風景

- 12月 15日 図面(1/20)作成終了
 12月 17日 カマドと主柱穴の断ち割り
 S H16でカマド構築上確認
 崩落土から土師器長胴甌片出土
- 12月 18日 降雪のため作業中止
 12月 19日 15cmの積雪
 現地調査終了

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

- ◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項(周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知)
 •平成23年8月9日付、中高名支四工第798号
 (中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて)

◎文化財保護法第99条第1項(発掘調査の着手報告)

- 平成26年11月12日付、教理第286号
 (三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成26年度・第2次】

◎文化財保護法第100条第2項(文化財の発見・認定通知)

- 平成27年1月19日付、教委第12-4429号
 (三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて) 【平成26年度・第2次】
 (泉・服部)

II 位置と環境

1 地理的環境

椋木遺跡（1）は、三重郡菰野町大字池底及び大字潤田に所在し、鈴鹿山脈の駿遊ヶ岳に源を発する海藏川の南岸と海藏川の支流竹谷川の北岸に囲まれた標高およそ67mに位置する。池底の集落は、もとは海藏川の南岸にあったが度々の氾濫で池の底のようになったことから、これを避けるため海藏川を越え、万治年間（1658年～1661年）に北方へ村越しをしている^①。

伊勢平野の北西部に位置する菰野町は、西は鈴鹿山脈を分水嶺として滋賀県甲賀市・東近江市に接し、鈴鹿山脈東麓に位置し、関西百名山に数えられる御在所山（1,212m）がそびえる。北はいなべ市と接し、濃尾平野の西端部、三重・岐阜県境でもある養老山地を東に望み、最南端の主峰多度山（403m）の麓には多度大社が鎮座する。

東と南は四日市市と接する。また南は茶畑等が営まれる微高地が続き、御在所山に源を発し、四日市市を潤しつつ伊勢湾へと注ぐ三瀧川が流れる。

菰野町は三重県内の町では最も人口が多く、およそ41,000人が暮らしている。町内には千草工業団地、赤坂工業団地、松山工業団地が立地し、内陸型の産業集積がされている。一方、鈴鹿国定公園に指定されている鈴鹿山脈一帯の急峻な山々は、鈴鹿セブンマウンテンの名で岳人に親しまれており、11都府県にまたがる東海自然歩道も町域を通過している。また、御在所山の麓は湯の山温泉の名で知られており、御在所ロープウェイの運行もあり、夏場は避暑地としても賑わいを見せている。

2 歴史的環境

旧石器時代 現在菰野町内では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。一方、菰野町に隣接する四日市市北部の山田町宮蔵遺跡では、チャート製のナイフ形石器が、また、四日市市西山町の西山小割遺跡では、チャート製の石核、チャート製の剥片が採集されている^②。今後の調査によって、菰野町域でも

鈴鹿山脈山麓部において旧石器時代に人々の暮らしと営まれていたことが明らかになる可能性もある。

縄文時代 大字音羽の鈴山遺跡（2）では、縄文時代早期の煙道付炉穴10基、集石炉2基、押型文土器片を確認した。また、中期の堅穴住居13棟、県内最古例となる掘立柱建物6棟、大型土坑2基、陥穴9基のほか、中期後葉を中心とした土器及び石器を確認した^③。大字小島の六谷遺跡（3）では、昭和58（1983）年の発掘調査で縄文時代の土坑が確認され^④、大字潤田の大久保遺跡（4）では、平成26（2014）年の発掘調査で、注口土器の注口部や縁帶文土器、突帯文土器などの縄文時代後期後葉から晩期の遺物が出土した^⑤。一方、大字千種、大字杉谷、大字竹成、大字永井などの高原や小高い丘では土器や石器などの遺物が表面採集されている。大字杉谷の觀音寺境内地からは、黒灰色で表面に押型文がある縄文早期の植物繊維を含む土器が、七ツ塚古墳群の西側の採石場からは、石匙、石斧が、尾高高原では石鏃や縄文から弥生時代の環状石斧の破片が見つかっている^⑥。

大字竹成と大字永井が接する所にある高原遺跡（5）では、環状石斧の一種と考えられている三頭石斧が見つかっている^⑦。昭和44（1969）年には大字千草の江野高原にある西江野A（6）、B遺跡（7）で、考古学に关心を持つ地元の二人の高校生が縄文時代草創期に矢の柄を削って整えるために砥石として使われていた矢柄研磨器を発見している^⑧。

弥生時代 菰野町では弥生時代の遺跡が本格的に発掘されたことはないが、大字杉谷は、弥生時代の遺物が出土する地区として知られている。大字杉谷の高塚と呼ばれる山林から灰色の石斧が、同じく大字杉谷の採石場付近から石斧、たたき石、石包丁が見つかっている。また高杯の破片や薄茶色と赤土色の壺の破片なども見つかっている。これらのことばは、この付近が縄文・弥生時代の複合遺跡であることを物語っている。

大字大強原の飛塚古墳（8）では、墳丘の下層から弥生時代後期の堅穴住居が確認されており、高杯や壺が出土している^⑨。

古墳時代 蕨野町で確認されている古墳の大半は円墳であるが、当時代の集落跡は確認されていない。

後期の6世紀末から7世紀前半に造営された高塚古墳（9）、黒石原古墳群（10）、七ツ塚古墳群・奥郷浦古墳群（11）などの群集墳が大字杉谷の朝明川両岸の上流部に集中している。

大字大強原の飛塚古墳（8）は、高さ3m、直径32mの円墳である。蕨野町に現存する独立墓として最大級のものであり、柳ヶ塚、首人塚とも呼ばれる。この地域に勢力のあった豪族の墓、もしくは成務天皇時代の県主の墳墓とも言われており、明治末ごろには銅鏡、勾玉、管玉、鉄刀が出たという伝承もある。平成24（2012）年の発掘調査では、外側が赤い顔料で塗られた家形埴輪の破片が出土した。また、すんぐりとした筒状部と蓋のような口縁部を持ち、表面と口縁部の内面が赤く塗られた円筒埴輪も出土した。これらの出土品から、この古墳は、この地の有力な人物の墓であったと考えられている。現在、飛塚古墳は現状のまま保存されている⁹。

飛鳥・奈良・平安時代 大字小島の六谷遺跡（3）では、堅穴住居と掘立柱建物群が見つかり、奈良時代前半の集落跡と考えられている¹⁰。大字田光の下江平遺跡（12）では、「五十戸口」「倭家」等の墨書き土器が堅穴住居から出土している。「五十戸口」については、飛鳥・藤原・平安京などの官衙遺跡の出土品に多いことから、律令国家形成時における国都里制と深く関わる資料と考えられている。また、整然と配置された8世紀中頃の掘立柱建物群が見つかっており、律令国家における地方行政組織に関する遺構と考えられ、「五十戸口」との関連から里長クラスの在地豪族層の居宅の可能性も考えられている¹¹。

平安時代後期から中・近世 蕨野町域は、平安後期から伊勢神宮の神領地として寄進されてきた。鎌倉時代に伊勢神宮の神領地を記した『神鳳鈔』¹²によると、本遺跡の周辺には池底御厨があったという記録がある¹³。中世の遺跡としては、大字杉谷に杉谷中世墓跡（13）があり、鎌倉・室町時代の宝篋印塔や五輪塔が合わせて200基近く残っている。また、火葬穴が10基ほど確認されている。そのほか、古瀬戸の四耳壺や常滑の二筋壺などの骨壺が出土したこともあり昭和45（1970）年に県指定の中世墳墓の史

跡となつた¹⁴。

杉谷中世墓跡の南の杉谷城跡¹⁵（14）は、元亀元年（1570年）に千種越えで織田信長を狙撃した杉谷善住坊が城主であったと伝えられている。そのほか千種城跡（15）、向城城跡（16）、金ヶ原城跡（17）などの中世城館が大字千草に点在している。戦国時代、この地は伊勢国の四つの勢力の一つである「北勢四十八家」といわれる諸侯がいたが、この中の棟梁的役割を担っていたのが千種氏であったといわれている¹⁶。

慶長5（1600）年には、徳川氏の家臣となった土方雄氏が蕨野城（18）に入り、城下町として発展した。

明治6（1873）年の廢城令により廢城となった蕨野城は、現在蕨野小学校の敷地となっている。国道306号のバイパス建設に伴う発掘調査では、角櫓下の石積などの近世の遺構が見つかっている¹⁷。椋ノ木遺跡の西には、徳川3代將軍家光が、諸国に巡見使を派遣するために整備した街道である巡見道が通っている。南は東海道の亀山と接続し、北は中山道の関ケ原へと続くこの道は、現在その多くが国道306号として利用されている。

大字竹成の大日堂の境内には、嘉永5（1852）年に竹成出身の神端和尚が建立を免願し、桑名の石工、石長である藤原長兵衛の一門により慶應2（1866）年に完成した五百羅漢がある。明治9（1876）年の伊勢暴動により大日堂は焼失し、その後の廢仏毀釈により五百羅漢も石造の首が落とされるなど衰微したが、大正5（1918）年に竹成米の発見者である松岡直右衛門の顕彰碑が建立されると、大日堂境内も再整備された。昭和42（1967）年には県指定史跡となつた¹⁸。
（泉）

【註】

①竹内理三『角川日本地名大辞典』24三重県（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1991年）

②四日市市『四日市市史』第2巻資料編考古I（1988年）

③三重県埋蔵文化財センター『鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告』（2018年）

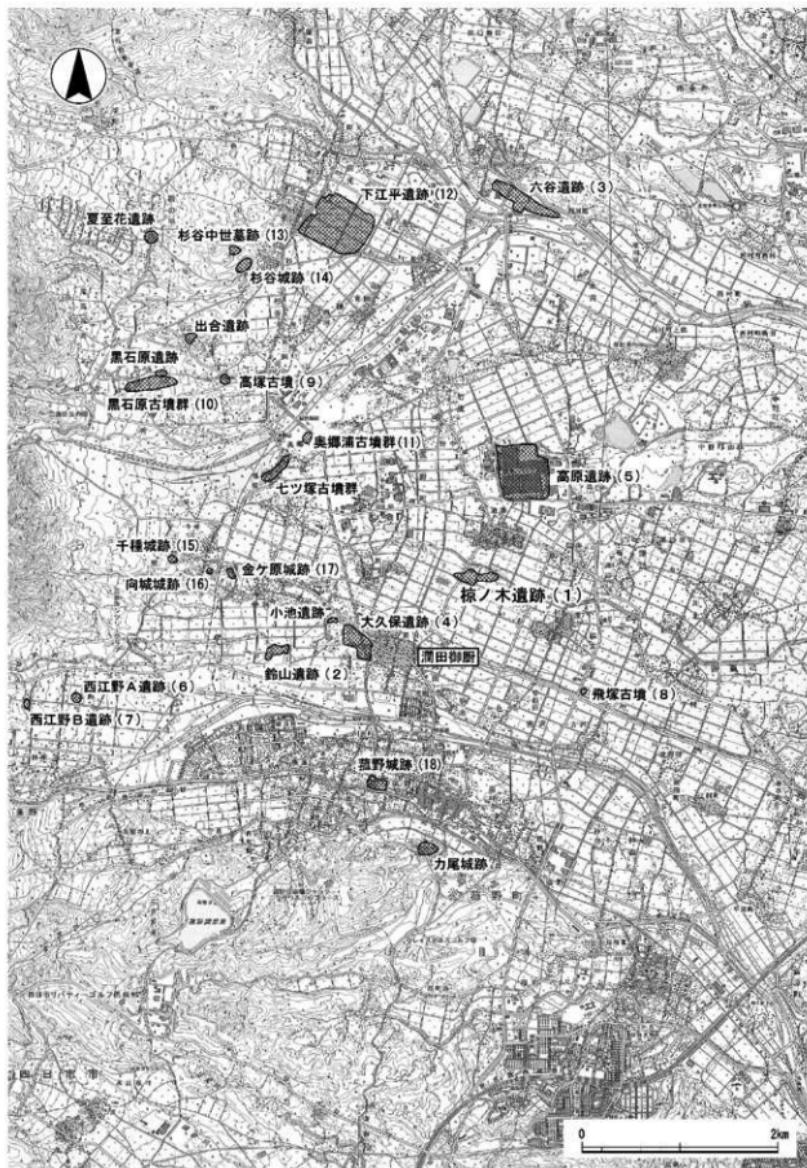
④三重県教育委員会「六谷遺跡」『昭和58年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（1984年）

⑤三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』（2016年）

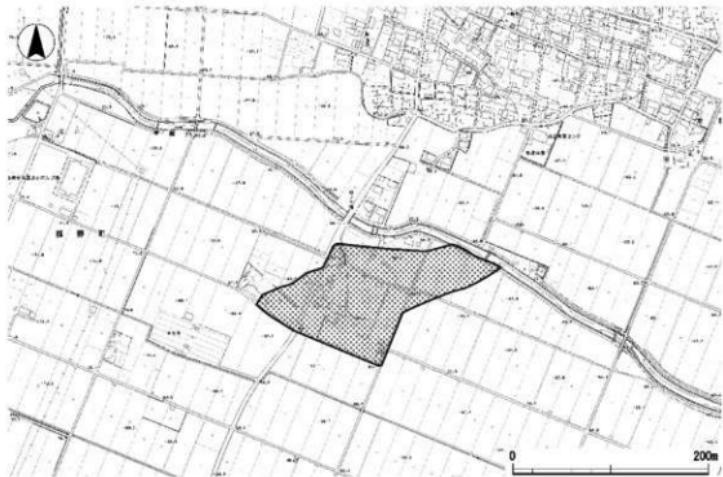
- 三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第3次）発掘調査報告』（2017年）
⑥菰野町教育委員会『菰野町史』上巻（1987年）
⑦前掲⑥に同じ。
⑧前掲⑥に同じ。
⑨三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』（2015年）
⑩前掲⑨に同じ。
⑪前掲④に同じ。
⑫菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告Ⅰ』（1987年）
菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』（1988年）
⑬『群書類従』第1巻所収
- ⑭前掲⑤に同じ。
⑮前掲⑤に同じ。
⑯前掲⑤に同じ。
三重県埋蔵文化財センター『力尾城跡発掘調査報告』（2001年）
三重県教育委員会『三重の中世城館一開発集中地域中世城跡分布調査報告－』（1976年）
⑰前掲⑥に同じ。
⑱三重県埋蔵文化財センター『菰野城跡発掘調査報告』（1998年）
⑲『日本歴史地名大系24 三重県の地名』（平凡社 1983年）



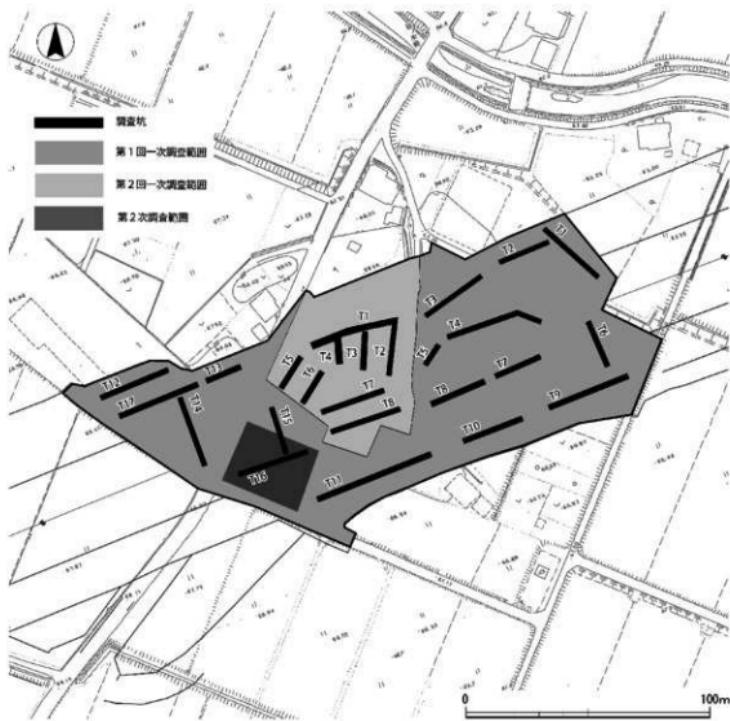
写真3 遺跡遠景



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

III 層序と遺構

1 層序

棕木遺跡は、朝明川と海蔵川の支流竹谷川に挟まれた標高およそ67mに位置する。当遺跡の北側に流れる海蔵川に向かって緩やかに傾斜している。

調査区の土層断面は、東西A-A'（南面）と南北B-B'（西面）で層位の確認を行った（第5図）。

調査区南面では、東西A-A'の東側半分ほどがコンクリートブロックが含まれる埋立土によって搅乱され、土層の残存が悪い。一方、土層の残存が比較的良好な西側部分では地表から0.4m～0.7mは畑作の埋土が、0.7m～1.3mの深さでは水田に関する層が3層確認された。また、10YR2/2黒褐色極細粒砂の包含層が地表から1mの深さで一部確認された。なお、SK22の埋土が東から12m～14m付近で、SH1煙道が25m付近で、SD4埋土が17m～19m付近でそれぞれ確認された。

調査区西面では、地表から0.8m～1.0mの深さに水田に関する層が、1.0m～1.4mの深さで10YR2/2黒褐色極細粒砂の包含層が確認された。なお、SD4埋土が南から9m～13m付近で確認された。

このように土層の観察から、これまで畑地または水田として利用されていたことがわかった。また地表から1m～1.4mの深さで確認された2.5Y4/4オリーブ緑（極細粒砂の径2.0～5.0cmの円錐混じる）の第7層を飛鳥時代の遺構検出面とした。

なお、SH19の埋土から弥生時代中期の土器が出土したことから、この埋土が繩文時代から弥生時代中期の包含層であると仮定し、2本の調査坑を設定し、以下のとおり下層調査を行った（第4図）。

〈T1〉上の黒褐色土層から約1m下で、褐色シルト層～黒褐色シルト層～黒褐色粗粒砂層の、全体として黒っぽい層とその下の淡黄色粗粒砂層が確認された。

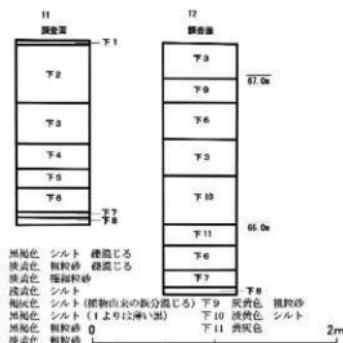
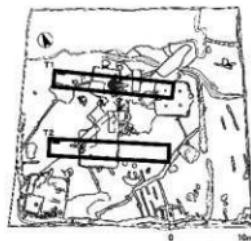
淡黄褐色粗粒砂層（縦合）の縦の状況や砂の堆積状況から、この土砂は調査区のはば真西から流れてきたようであるが、砂礫の堆積は、河川活動による堆積ではなく、近くに溜まった土砂が何らかの要因

により流れ込んだものと考えられる。

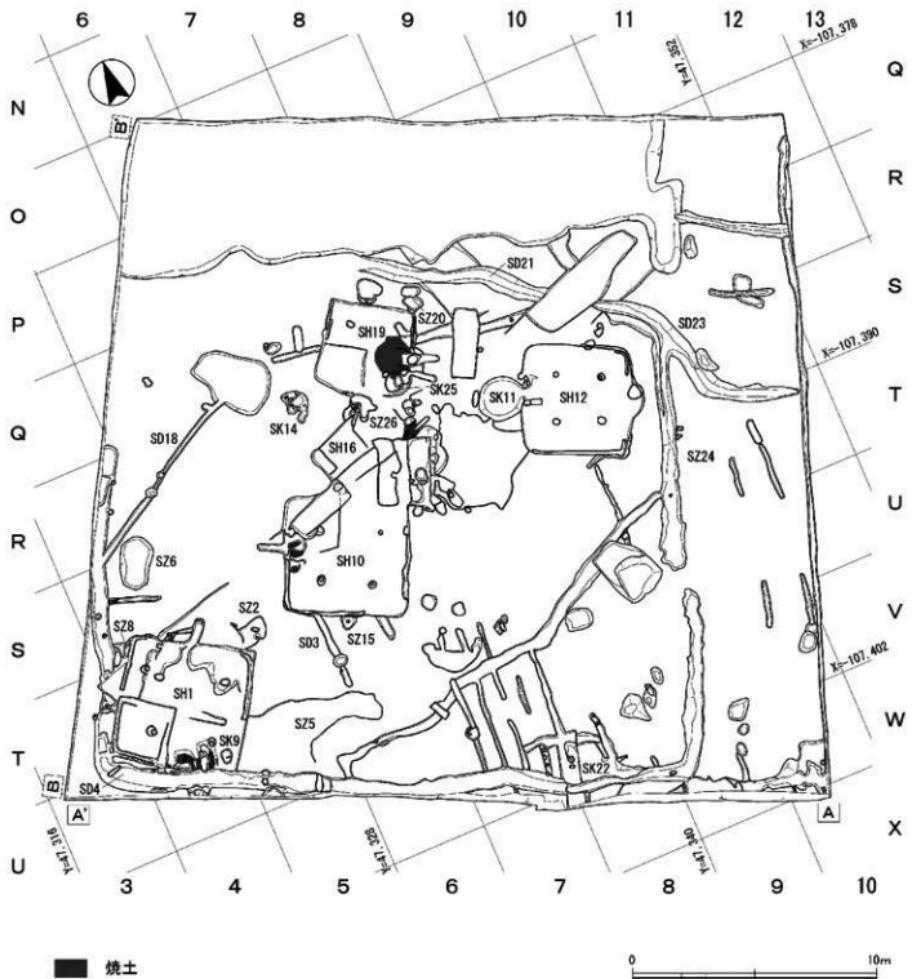
〈T2〉上の黒褐色土層は、東に行くにつれ薄くなっていた。また、T1と同様、上の黒褐色土層から約70cm下で、黄灰色シルト層の、全体として黒っぽい層とその下の淡黄色粗粒砂層が確認された。

T1・T2いずれにおいても下層6・7で黒褐色土層が確認されたが、その部分で遺構や遺物は確認できず、その土層自体にも人為的な様子は見られなかった。

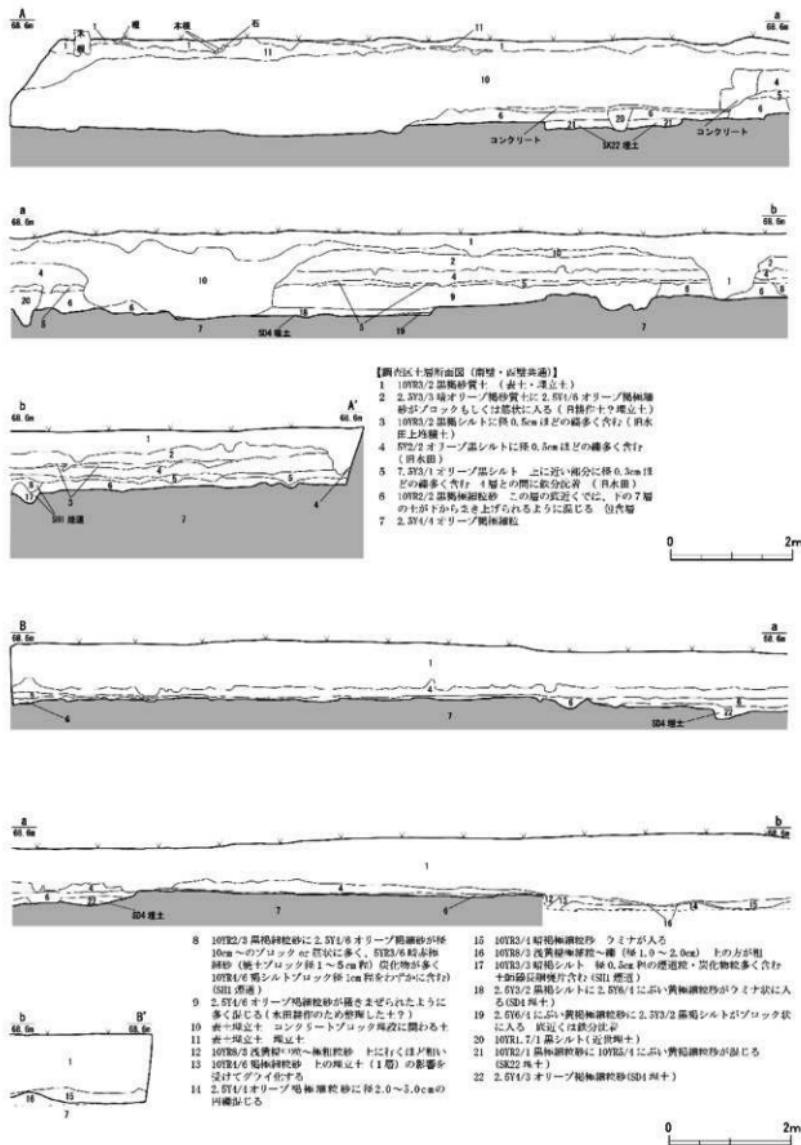
なお、T1及びT2から採取した黒褐色土層の3点のサンプルの自然科学分析では、繩文時代中期後半のなかでも古い年代から新しい年代に相当する暦年代を示す結果が得られている。このことも、土層の観察状況の結果を裏付けている。（泉）



第4図 下層調査のトレント配置と土層柱状図



第5図 遺構平面図 (1 : 200)



第6図 調査区土層断面図 (1 : 80)

2 遺構

飛鳥時代の堅穴住居5棟（SH1・SH10・SH12・SH16・SH19）、土坑（SK22）と不明遺構（SZ20・SZ24など）を検出した。いずれの堅穴住居もカマドを有しており、SH12を除く堅穴住居からは煙道も確認した。また、SH1から貯蔵穴（SK9）、SH19から貯蔵穴（SK25）をそれぞれ確認した。出土遺物には、土師器の甕や須恵器の杯、甕、高杯、提瓶などがある。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は、土坑1基（SK14）にとどまる。天目茶碗が出土した。

江戸時代以降に畑や水田耕作に用いられたと考えられる溝（SD3・SD4・SD18・SD21・SD23）も確認した。

（1）飛鳥時代

SH1（第7図） 調査区南西端で検出した堅穴住居である。平面形は隅丸方形で、長辺6m以上、短辺5m、検出面からの深さ34cmである。当初はカマドの煙道ではないかと考えていた北辺中央の突出部から土器が多数出土した。土師器の長胴甕で口縁部と底部は欠けており体部のみである。

南辺中央のやや東からSD4に切られているカマドと煙道を確認したことから、北辺の突出部は別の用途のものであると考えられる。

また、カマドの東20cmの地点に貯蔵穴（SK9）を検出した。主柱穴を4つ確認し、北東と南西の主柱穴からは土師器片が出土した。

SH10（第8図） 調査区中央のやや西で検出した堅穴住居である。平面形は隅丸方形で、長辺5m、短辺4.5m、検出面からの深さ42cmである。北辺の大半はSH16と重複しており、確認できなかった。西辺の中央にカマドを有し、長さ1m、幅30cm、深さ33cmの煙道も確認した。主柱穴を4つ確認した。

出土遺物には、7世紀代のものとみられる土師器甕（33～35）、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯蓋（36）と須恵器杯身（37）がある。

SH12（第9図） 調査区中央のやや東で検出した堅穴住居である。平面形は隅丸方形で、長辺4.2m以上、短辺4.1m、検出面からの深さ35cmである。西辺中央に接するように円形の土坑（SK11）があ

る。このSK11によってカマドの残存状況は良くないが、カマド袖部の構築土から焼土塊と須恵器片を確認した。主柱穴を4つ確認した。

出土遺物には、土師器甕（38・39）、6世紀末葉から7世紀中葉とみられる須恵器杯蓋（40）と須恵器杯身（41～43）がある。

SH16（第10図） 調査区中央で検出した堅穴住居である。北と南をそれぞれSH19、SH10と重複し、残存状況が良くないため平面形は不明である。

東辺の中央で焼土を検出した。その焼土から東に延びる長さ約80cm、幅18cm、深さ10cmの煙道も検出した。

出土遺物には、南東の壁周溝の隅と想定される付近から出土した6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯身（44）がある。

SH19（第11図） 調査区中央のやや北で検出した堅穴住居である。平面形は方形で、長辺3.5m、短辺3.4m、検出面からの深さ最大約37cmである。南西部でSH16との重複がある。

南東辺に2つの突出部があり、いずれもカマドの煙道と思われる。北部の突出部の規模は、長さ1.1m、幅30cm、深さ最大56cmである。南寄りの突出部の規模は、長さ1m、幅22cm、深さ最大37cmである。南東隅で貯蔵穴（SK25）を確認した。

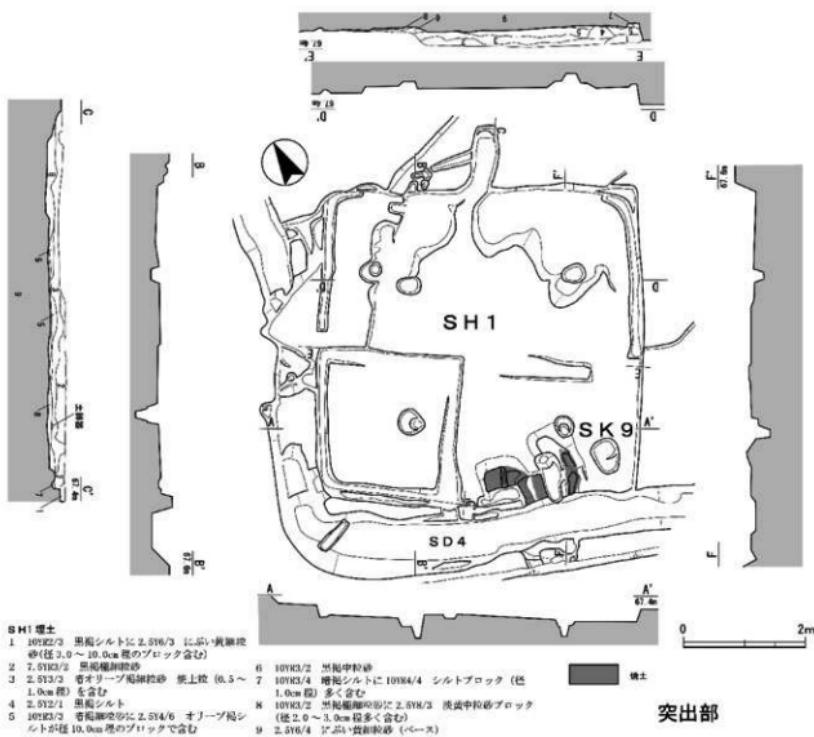
出土遺物には、7世紀代のものとみられる土師器甕（45～49）、ともに6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯蓋（50）、須恵器杯身（51）がある。いずれも貯蔵穴付近から出土した。

SK9 SH1の貯蔵穴である。規模は長径60cm、短径50cm、深さ20cmである。

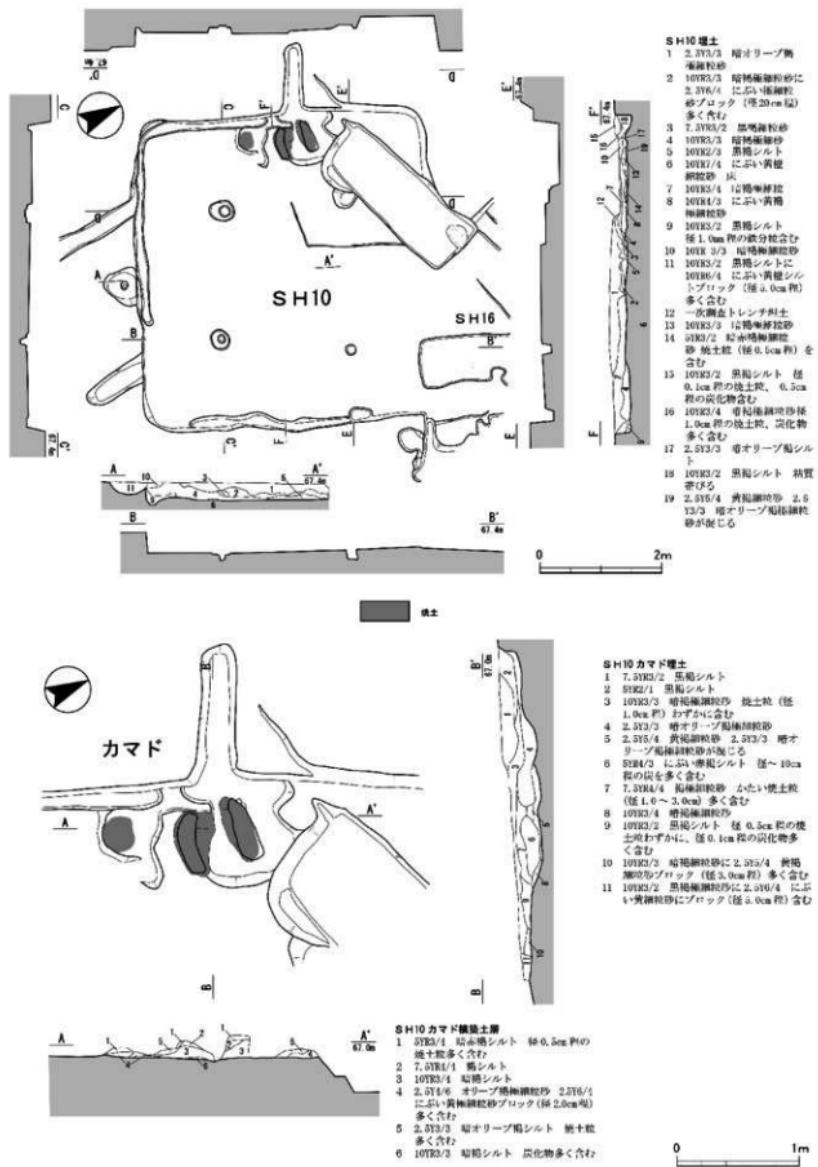
SK11 SH12の西辺中央に接するかたちで検出した円形の土坑で、規模は直径1.6m、深さ43cmである。土師器甕（59）の底部が出土した。

SK22（第12図） 調査区南端で検出した土坑である。平面形は方形に近く、東西1.8m、南北2.5m、深さ12cmである。南側はSD4や耕作溝によって切られている。

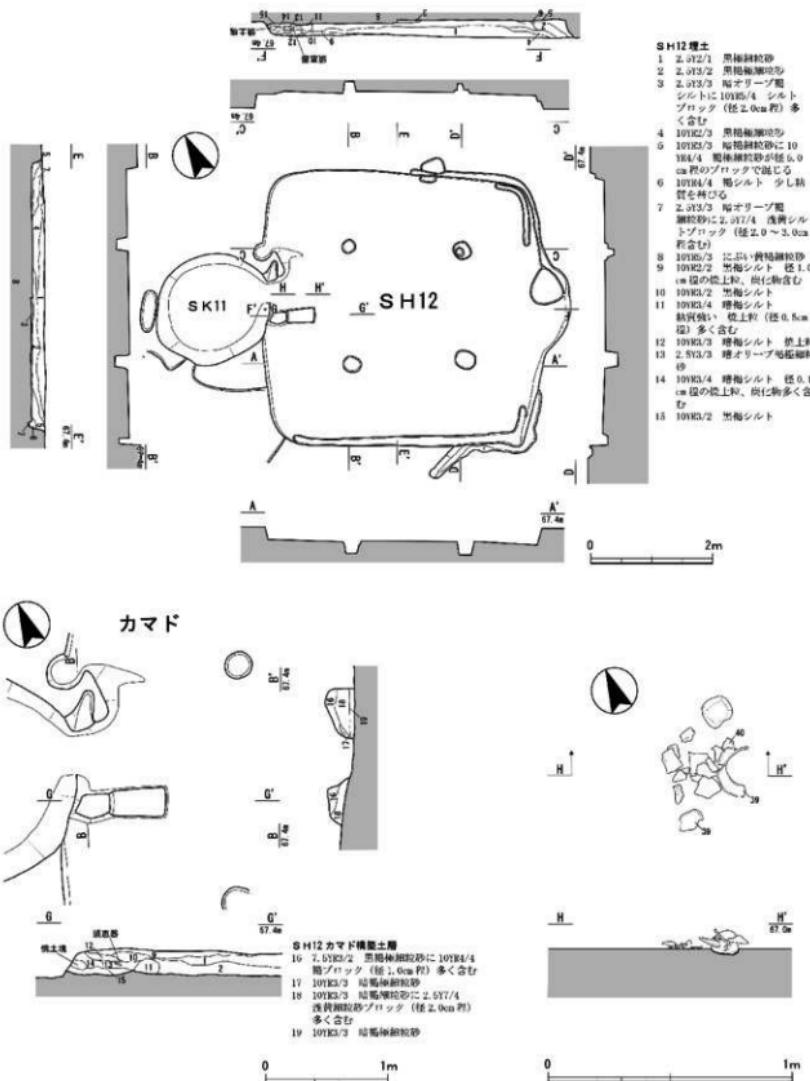
出土遺物には、ともに7世紀代のものとみられる土師器甕の口縁部（60）、土師器甕の口縁部から体部（61）がある。ほかに、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯蓋（62）がある。



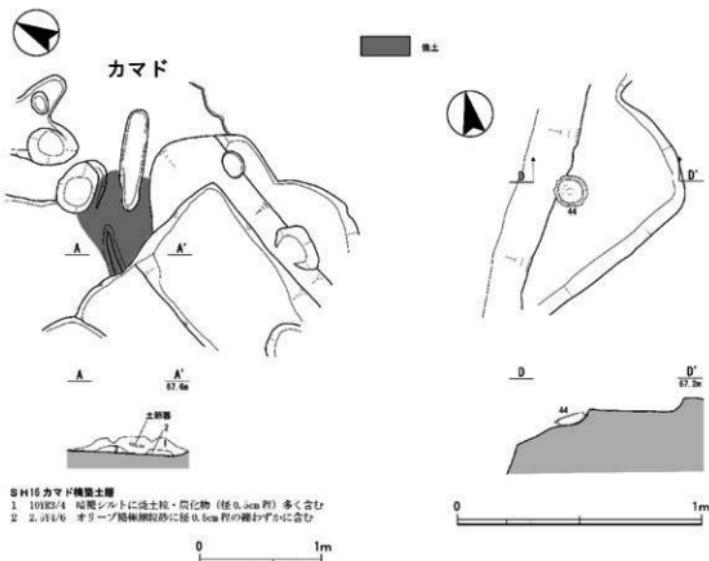
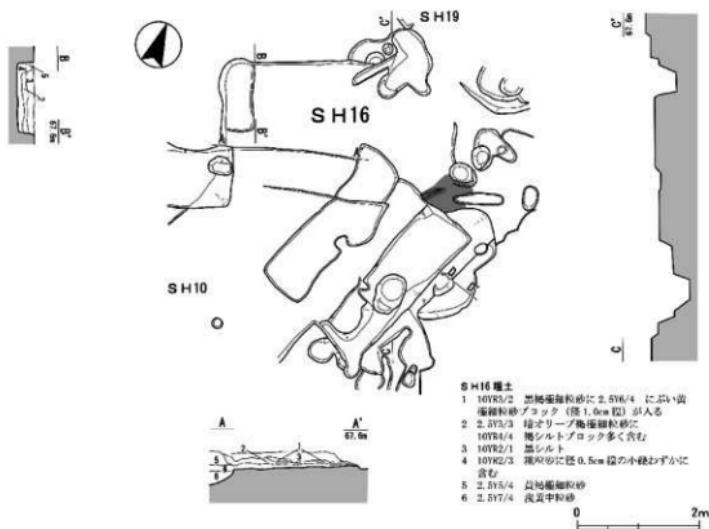
第7図 SH1・カマド・突出部実測図 (1:80・1:40・1:20)



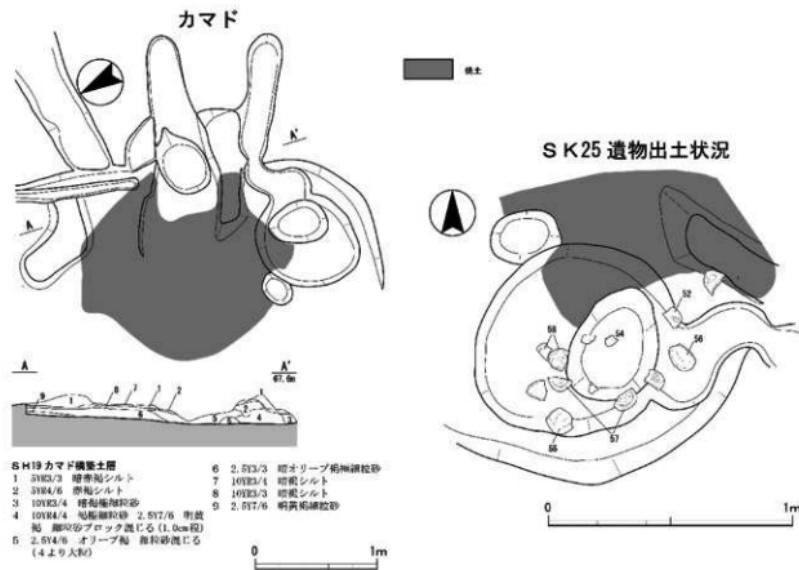
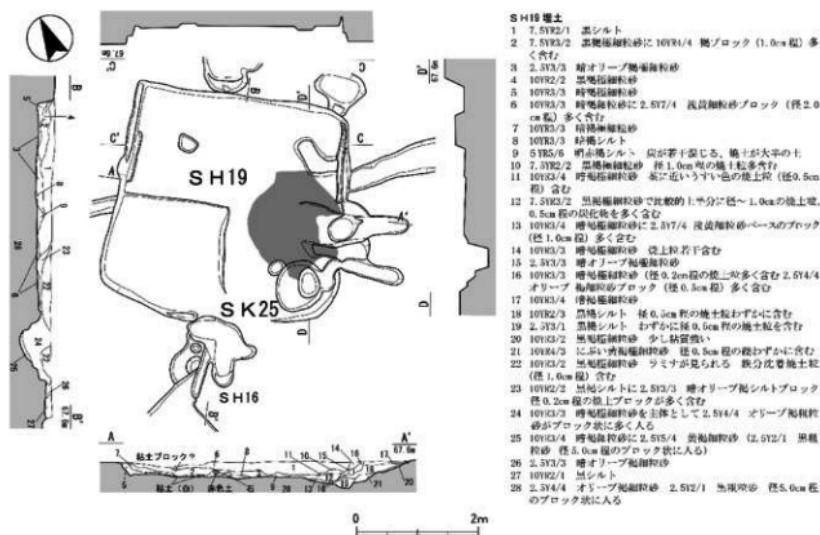
第8図 SH10・カマド実測図 (1:80・1:40)



第9図 SH12・カマド実測図、遺物出土状況図 (1:80・1:40・1:20)



第10図 SH16・カマド実測図、遺物出土状況図 (1:80・1:40・1:20)



第11図 SH19・カマド実測図、SK25遺物出土状況図 (1:80・1:40・1:20)

S K25 (第11図) 堅穴住居 S H19の貯蔵穴である。直径80cm、深さ28cmの円形である。

S Z20 S H19の壁周溝東隅付近で検出した性格不明遺構である。平面形は歪な楕円形であり、東西0.7m、南北1m、深さ33cmである。

出土遺物には、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器高杯の脚部(67)のほか、同時期のものとみられる須恵器長頸壺もしくは瓶の口縁部(68)がある。

S Z24 調査区中央のS H12とS H16の間で検出した性格不明遺構である。平面形は方形に近く、堅穴住居の可能性も考えられる。東西3.7m、南北4.5m、深さ15cmである。

出土遺物には、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器高杯の脚部(69)がある。

(2) 戸戸時代以降

S K14 調査区中央のやや北で検出した土坑で、規模は長径1.2m、短径1m、深さ56cmである。17世紀前半とみられる天目茶碗(76)が出土した。

S D 4 調査区西壁から南壁沿いにかけて検出したコの字を時計回りに90度回転したような形状の溝である。調査区南端でS H1のカマドを切り、さらに約14m東でS K22を切っている。一部は調査区外に達しているとみられるが、全長53m、最大幅1.1m、深さ最大84cmである。畑作もしくは水田耕作に使われた溝であると考えられる。

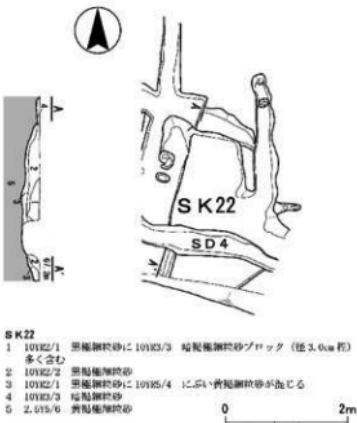
出土遺物には、7世紀代のものとみられる小型の土師器甕(63)のほか、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器高杯の脚部(64)がある。

S D 18 調査区西壁中央のやや南からS H12の北にかけて検出した溝で、緩やかに弧を描く。全長14m以上、最大幅40cm、深さ最大5cmである。畑作もしくは水田耕作に使われた溝であると考えられる。

出土遺物には、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯身(65)がある。

S D 23 S H12の壁周溝東隅付近から調査区東部へと延びる全長9.8m、最大幅1m、深さ28cmの溝である。畑作もしくは水田耕作に使われた溝であると考えられる。

出土遺物には、6世紀末葉から7世紀中葉のものとみられる須恵器杯身(66)がある。(泉)



第12図 SK22実測図 (1:80)

遺構番号	グリッド	規模			時代	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
S Z 2	T-5	1.4	0.9	0.12	飛鳥	S H 1 北東隅
S D 3	T-U 6	3.2	0.2	0.13	飛鳥	
S D 4	Q-W 4-10	53.0	1.1	0.84	江戸以降	
S Z 5	T-U 4-6	5.9	0.9	0.20	飛鳥	
S Z 6	R-S 4	2.2	1.3	1.11	飛鳥	
S H 7						欠番 S H10のこと
S Z 8	S 4	推定1.4	推定1.2	0.26	飛鳥	S H 1 北西隅
S K 9	U 4	0.6	0.5	0.2	飛鳥	S H 1 内土坑
S K11	R-S 8-9	1.6	1.6	0.43	飛鳥	
S H13						欠番 S H16のこと
S K14	R 6-7	1.2	1.0	0.56	鎌倉～室町	
S Z15	T 6	0.6	0.5	0.30	飛鳥	
S Z17	R 7-8	不明	不明	不明	飛鳥	焼土
S D18	Q-R 4-9	14.0以上	0.4	0.05	江戸以降	
S Z20	Q 8	1.0	0.7	0.33	飛鳥	
S D21	Q-R 8-9	7.6	0.8	0.21	飛鳥	
S K22	V 7-8	2.5	1.8	0.12	飛鳥	
S D23	R-T 10-11	9.8	1.0	0.28	江戸以降	
S Z24	S-U 9-10	4.5	3.7	0.15	飛鳥	
S K25	R 7-8	0.8	0.8	0.28	飛鳥	S H19の貯蔵穴
S Z26	R 7	1.4	1.2	0.51	飛鳥	

第1表 遺構一覧表

遺構番号	グリッド	形状・規模				附属施設		
		平面形	長軸×短軸(m)	深さ(m)	面積(m ²)	周壁溝	カマド	貯蔵穴
S H 1	S-U 3-5	隅丸方形	6.0以上×5.0	0.34	30.0以上	○	○	○
S H10	S-T 6-7	隅丸方形	5.0×4.5	0.42	22.5	○	○	-
S H12	R-T 8-10	隅丸方形	4.2×4.1	0.35	17.2	○	○	-
S H16	R-S 6-8	不明	不明	不明	不明	○	○	-
S H19	Q-R 7-8	隅丸方形	3.5×3.4	0.37	11.9	○	○	○

第2表 堅穴住居一覧表

IV 遺物

弥生土器をはじめとして、飛鳥時代を中心とする土師器及び須恵器、その他に陶器碗や小皿などが出上した。発掘調査によって出土した遺物はコンテナパット17箱で、実測した遺物の点数は76点である。

1 弥生時代

1から15は弥生時代中期中葉の土器³である。これらは、飛鳥時代の堅穴住居をはじめとして各時代の遺構から出土した。1～3は壺である。1は口縁部が強く外反して刺突がなされている。内外面共にハケメによる調整がなされている。2は口縁部で、3は口縁部から頸部にかけてのものである。共に口縁端部が押圧によって、つまみあける個所が残る。4は細頸壺の口縁部である。口縁部はやや丸みを帯び、外面には櫛描波状文がなされている。5～15は壺の体部である。5・6は櫛描直線文がなされている。共に頸部の可能性がある。7は沈線が巡り、弧状文が描かれ、その間に円形浮文が貼り付けられている。その周囲は繩文がなされている。8は体部細片のため天地が不明瞭である。斜格子文であろうか。9は体部で、下半部に沈線が2条なされ、その沈線間に繩文がなされている²。10～15は破片のため、傾きが異なる可能性もある。11～15はそれぞれ繩文がなされている。

2 飛鳥時代

S H 1 16～23は土師器壺である。16～18・20は口縁部から頸部にかけてのものである。19は口縁部から体部にかけてのものである。16～20の口縁端部は外面に面を持つように摘み上げられている。21は体部である。外面に「×」状のヘラ記号がなされている。22・23は長胴壺である。22は体部に掠った痕跡が残り、ハケメ調整が削られている。23は口縁端部が丸くまとまる。これらの壺の時期は、7世紀代³のものであろう。24は土師器壺の把手とみられる。差し込み状の痕跡を留める。25は須恵器杯蓋、26・27は杯身である。28は須恵器高杯の脚部である。接地面は折り返されて、四角く踏ん張るかのようである。

29は平瓶もしくは壺の口縁部であろう。口縁部はやや尖り気味にまとまる。30は長頸壺の口縁部から頸部にかけてものであろう。口縁部から徐々に厚みを増す。31は提瓶の体部とみられる。体部中央部に把手が付けられていた痕跡が残る。平瓶の可能性も残る。32は須恵器壺の頸部から体部にかけてのものであろう。25～32の須恵器の時期は、陶邑の編年⁵（以下、省略）のTK217型式のものとみられ、7世紀中葉頃のものであろう。

S H 10 33～35は土師器壺である。33は口縁部で、34・35は口縁部から体部にかけてのものである。頸部は、「く」の字状に屈曲し、口縁端部は外面に面を持つように摘み上げられている。33～35は7世紀代のものとみられる。36は須恵器杯蓋である。天井部から体部にかけて残存し、緩やかに傘状に開く。37は須恵器杯身である。底部はやや厚みがあり、口縁部と受部にかけては薄い。受部の先端はやや尖り気味にまとまる。須恵器の時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

S H 12 38・39は土師器壺である。38は口縁部で、39は口縁部から体部にかけてのものである。口縁端部は、外面に面を持つよう摘み上げられている。壺の時期は7世紀代のものであろう。40は須恵器杯蓋である。天井部はやや厚く、口縁部にかけて薄くなっている。41～43は須恵器杯身である。41・42は口縁部から体部にかけてのものである。43は口縁部から底部にかけてのもので、器壁はやや厚い。受部はやや丸みを帯びてまとめられている。須恵器の時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

S H 16 44は須恵器杯身である。杯身の底部の器壁はやや厚みがあり、口縁部から受部にかけて薄くなる。受部はやや弯曲している。須恵器の時期はTK217型式のものとみられ、7世紀中葉頃であろう。

S H 19 45～49は土師器壺で、口縁端部から体部にかけてのものである。全て口縁端部が面を持つよう摘み上げられている。壺の時期は7世紀代とみられる。50は須恵器杯蓋で、口縁部が残る。51は杯身である。口縁部から受部にかけて残る。受部はほぼ

水平である。須恵器の時期はTK217型式のものとみられ、7世紀中葉頃であろう。

S K25 52～54は土師器甕である。52は口縁部から体部にかけてのもので、頸部の屈曲が緩やかである。口縁端部が丸くまとまっている。53は口縁部から体部にかけてのもので、54は口縁部から頸部にかけてのものである。53・54は口縁端部に面を持つように摘み上げられている。甕の時期は7世紀代とみられる。55・56は須恵器杯蓋で、57・58は須恵器杯身である。55は天井部から緩やかに傘状に開く。56は55と比較して大きめで、口縁端部はやや内側に曲げられている。57は底部から受部にかけて緩やかに立ち上がる。58は底部がやや平である。底部外面には、正方形状に四角く区切ったものと対角線状に四方向に開く、ヘラ描きの沈線がなされている。須恵器の時期はTK209～217型式とみられ、6世紀末葉から7世紀中葉であろう。

S K11 59は土師器甕の底部である。底部には、半円形の穿孔が2個所あったとみられる。

S K22 60は土師器甕の口縁部とみられる。61は土師器甕で口縁部から体部である。時期は7世紀代のものであろう。62は須恵器杯蓋である。天井部が残存しており、やや焼成が不良である。62の時期はTK209～217型式とみられ、6世紀末葉から7世紀中葉であろう。

S D 4 63は土師器甕で、小型のものである。口縁部から頸部が残る。口縁部は他の小型から大型の甕と同様に端部に面を持つように摘み上げられている。時期は7世紀代のものであろう。64は須恵器高杯の脚部で、接地面は欠損している。

S D 18 65は須恵器杯身である。口縁部から受部にかけて残存する。やや低平な形である。時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

S D 23 66は須恵器杯身で、口縁部から受部にかけてのものである。時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

S Z 20 67は須恵器高杯の脚部、68は須恵器長頸甕もしくは平瓶の口縁部である。高杯の脚部は接地面がやや尖り気味で、脚の端部は折り返して肥厚させている。焼成は不良である。68は口縁部がやや薄手で頸部に近づくにつれ厚みを増す。須恵器の時期は、

TK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

S Z 24 69は須恵器高杯の脚部である。脚部は接地面がやや四角くまとまつておらず、踏ん張つてある。時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

包含層 70は須恵器無蓋高杯で、杯部が残存している。時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

表土 71は須恵器杯身で、口縁部から受部にかけてのものである。須恵器の時期はTK217型式とみられ、7世紀中葉頃であろう。

3 鎌倉時代から江戸時代

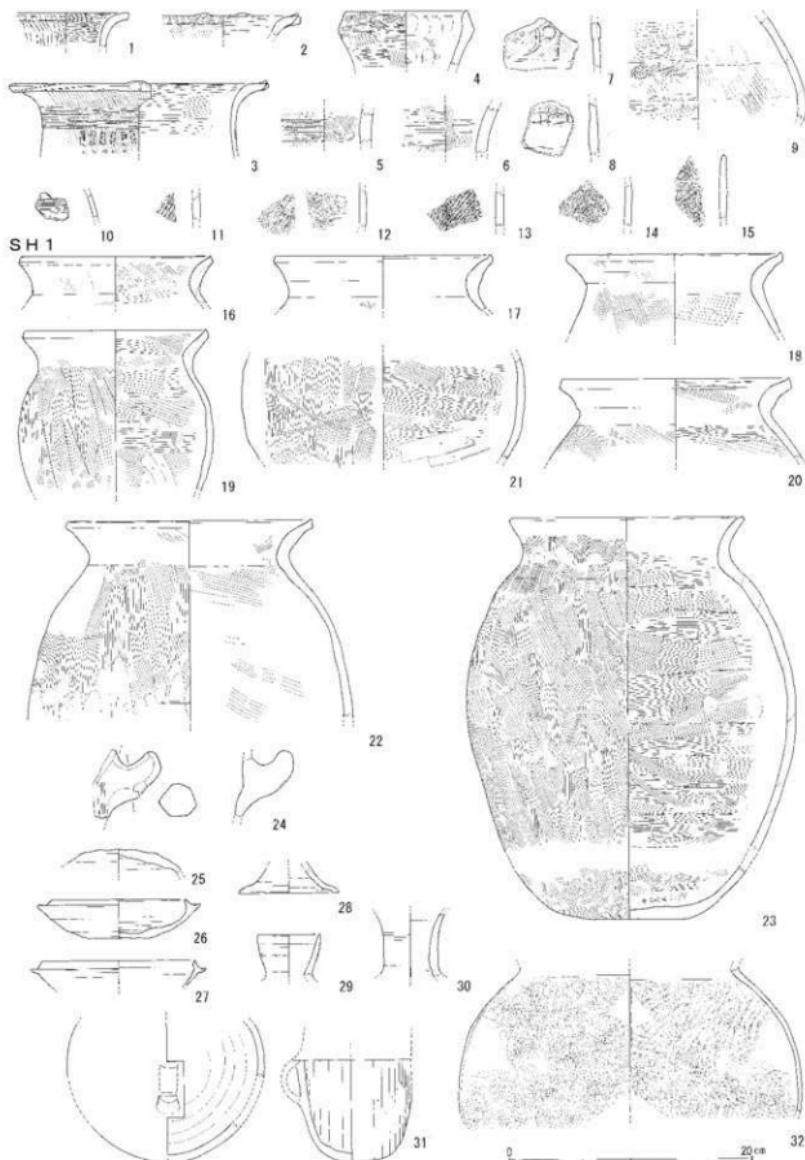
表土 72は灰釉の陶器皿である。口縁部は緩やかに外反する。美濃のものとみられ、時期は17世紀後半以降であろう。

トレンチ4・9 73はトレンチ9出土のもので陶器小皿である。口縁部が強く屈曲している。尾張型第5型式とみられ、13世紀を前後するものであろう。74・75はトレンチ4出土のもので、山茶碗である。74は口縁部が欠損しており、体部から底部のものである。75は口縁部がやや肥厚しており外面に緩い面を持っている。共に尾張型第6型式とみられ13世紀前半であろう。

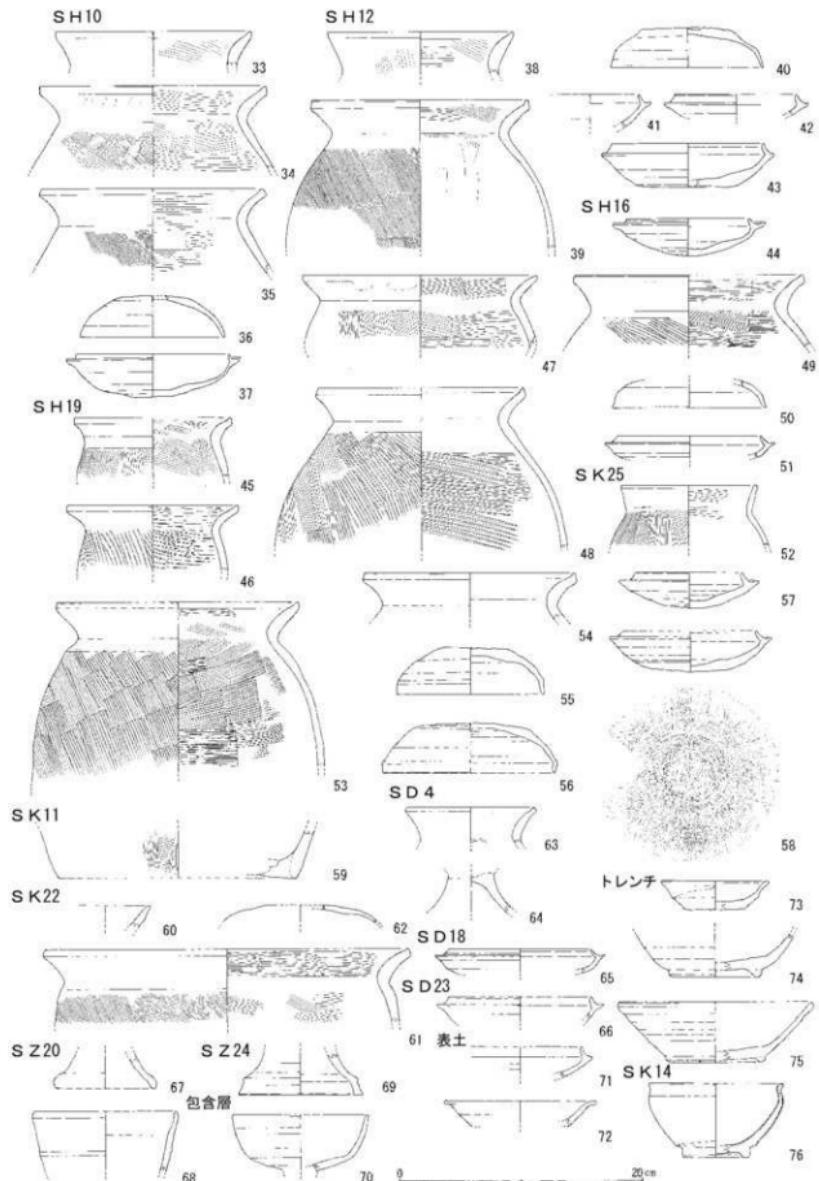
S K14 76は天目茶碗である。口縁部は強く屈曲し外反する。高台部は削り出しとみられる。時期は藤澤編年の大天目茶碗1類とみられ、17世紀代であろう。
(萩原)

【註】

- ①上村安生『弥生土器の様式と編年』(木耳社 2002年)
- ②三重県埋蔵文化財センター『納所遺跡I 一遺構・土器・木製品編一』(2012年) 報告番号330と784が似かよる。
- ③東海考古学フォーラム『鏡と甕そのデザイン』(1996年)
- ④古代の土器研究会『古代土器研究』1 (1999年)
- ⑤愛知県『愛知県史』別編富業2 中世・近世 濱戸系 (2007年)



第13図 出土遺物実測図（1）



第14図 出土遺物実測図（2）

種別 番号	実測 番号	種類	部種等	出土位置 グリッド ¹⁾	出土状態等	計測値 (cm) 口幅 側高 底径	調整直法の特徴		色調	断土	残存	備考		
							内:ハケ 内:ハコ	内:ハコ 内:ハコ						
1	001-01	陶生土器	甕	R-T	S1109	-	-	-	灰:ハケ 内:ハコ	灰:黄褐色 10VR 5/3	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 剥離		
2	001-01	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰:ハコ 内:ハコ	灰:黄褐色 10VR 6/3	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 剥離 削除 印:手印模様		
3	001-02	陶生土器	甕	R-H	S1109	23.2	-	-	灰: 順滑直腹(口直)・ハケ面キザシ 内:ハコ	灰:黄褐色 10VR 4/1	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 つまみ上げ土舌 堆存		
4	001-03	陶生土器	瓶	R-H	S1109	9.8	-	-	灰: 深腹文(口ハコ)・ハケ・チダ 内:ハコ(内)・直腹(外)・手平・ヨコナラ ヨコナラ	灰:黄褐色 10VR 7/3	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 3/32		
5	001-06	陶生土器	甕	R-T	S217	-	-	-	灰: 順滑直腹 内:ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/4	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 口縁底 剥離		
6	001-07	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰: ハコ(外)の内:横括縫文・縦縫深く 内:ハコ	灰:黄褐色 7.5VR 7/6	小中粗 具	口縁底 剥離 小方		
7	001-08	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰:二つ手縫(底)・弧状文・円形浮文・ 内:ハコ(外)・ハコ	灰:黄褐色 10VR 8/3	小中粗 (~ 4mm粒石含)	具 口縁底 3/32	埋遺	
8	002-01	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰: (輪)黄褐色(底)・斜格子・ナマ・直腹 内:ナマ	灰:黄褐色 10VR 7/4	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 剥離		
9	002-08	陶生土器	甕	Q-H	S1109	-	-	-	灰: 二つ手縫・横括縫文・直腹文 内:ナマ(外)・オサキ・ナマ	灰:黄褐色 1.5VR 7/4	小中粗 (~ 3mm粒石含)	具 口縁底 剥離 小方	カット	
10	002-02	陶生土器	甕	R-T	S217	-	-	-	灰: 順滑直腹文・乳状文 内:ナマ	灰:黄褐色 10VR 3/2	小中粗 具	口縁底 剥離 小方		
11	002-07	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰: 滑文 内:ナマ	灰:黄褐色 7.5VR 7/4	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 口縁底 剥離		
12	002-09	陶生土器	甕	S-T	S1109	-	-	-	灰: 滑文 内:ナマ	灰:黄褐色 5VR 7/4	小中粗 具	口縁底 剥離 小方		
13	002-05	陶生土器	甕	R-T	S1109	-	-	-	灰: 滑文 内:ナマ	灰:黄褐色 1.5VR 7/4	小中粗 具	口縁底 剥離 手平		
14	002-06	陶生土器	甕	S-H	S221	-	-	-	灰: 滑文 内:ナマ	灰:黄褐色 7.5VR 7/4	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 剥離 小方		
15	002-04	陶生土器	甕	R-H	S1109	-	-	-	灰: 滑文 内:ナマ	灰:黄褐色 10VR 6/4	小中粗 具	口縁底 剥離 小方		
16	006-02	土器底	甕	T-5	S111	13.8	-	-	灰: ハコ(内)・ヨコナラ 内:ハコ(外)・ヨコナラ・ヨコナラ・ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/4	小中粗 具	口縁底 3/32		
17	003-02	土器底	甕	T-5	S111	17.8	-	-	灰: ヨコナラ・ハコ 内:ヨコナラ・ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/3	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 口縁底 1/32		
18	003-01	土器底	甕	T-A	S111	12.4	-	-	灰: ハコ(内)・ヨコナラ・ハコ 内:ヨコナラ・ハコ	灰:黄褐色 2.5VR 8/2	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 口縁底 2/32		
19	005-02	土器底	甕	T-4 T-4 T-4	S111	14.8	-	-	灰: ヨコナラ・ハコメ・ハコ 内:ヨコナラ・ハコメ・ハコ・ヘラカケヅシ	灰:黄褐色 2.5VR 7/3	小中粗 具	口縁底 4/32 雨蓋カマド 馬糞スズ行蓋		
20	003-06	土器底	甕	T-4 T-3	S111	18.6	-	-	灰: ヨコナラ・ハコ 内:ハコ(外)	灰:黄褐色 10VR 7/4	小中粗 具	口縁底 5/32		
21	013-04	土器底	甕	V-4	S111	-	-	-	灰: ハコ 内:ハコ・カケヅシ	灰:黄褐色 10VR 7/4 明治2.5VR 8/6 内:ハコ・エスカベル	小中粗 (~ 2mm粒石含)	具 口縁底 3/32 カット 休庭:「X」印		
22	014-01	土器底	甕	T-4	S111	20.0	-	-	灰: ヨコナラ・ハコメ 内:ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/4 明治2.5VR 5/6 内:ハコ・黄褐色10VR 7/2 明治2.5VR 8/2	小中粗 具	口縁底 3/32		
23	006-01	土器底	甕	V-4 T-6 U-4 T-4	S111	19.0	34.6	-	灰: ヨコナラ・ハコ・オサエ 内:ヨコナラ・ハコ・オサエ	灰:黄褐色 7.5VR 6/4	小中粗 (~ 3mm粒石含)	具 カット開 外盖スズ行蓋		
24	004-01	土器底	甕	T-4	S111	-	-	-	灰: ハコ・ナマ	灰:黄褐色 2.5VR 8/2	小中粗 具	口縁底 把手		
25	015-02	瓦他器	瓶	T-5	S111	-	-	-	灰: ヨコナラ・ロクロカケヅシ	灰:黄褐色 10VR 7/3 明治2.5VR 5/3 内:ハコナラ 内:ロクロナラ	小中粗 (~ 3mm粒石含)	具 天井底 のみ 残存		
26	004-01	瓦他器	瓶	V-4	S111	10.8	3.2	-	灰: ヨコナラ・自然地の表面あり	灰:黄褐色 10VR 4/4 明治2.5VR 3/3 内:ハコナラ 内:ロクロナラ	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 天井底 3/32 雨蓋カマド		
27	004-02	瓦他器	瓶	U-4	S111	12.8	-	-	灰: ヨコナラ	灰 N6/	具 口縁底 2/32	雨蓋カマド		
28	003-03	瓦他器	瓶	T-5	S111	-	8.2	-	灰: ヨコナラ 内: ヨコナラ	灰 N6/	具 口縁底 2/32	雨蓋 2/32		
29	003-01	瓦他器	瓶	T-5	S111	5.9	-	-	灰: 滑文・ヨコナラ	灰 N5/	具 口縁底 4/32			
30	004-01	瓦他器	甕	T-5 T-5	S111 SK25	-	-	-	灰: 滑文・横括縫・ロクロナラ 内: 自然地・ロクロナラ	灰 N7/ N4/	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 口縁底 8/32	埋遺	
31	003-01	瓦他器	甕	U-4	S111	16.2	10.7	-	灰: ハコナラ・ヨコナラ・ロクロナラ 内: ヨコナラ・ロクロナラ	灰 N5/	小中粗 (~ 1mm粒石含)	具 8/32		
32	003-06	瓦他器	甕	V-4	S111	16.0	-	-	灰: ハコナラ・ヨコナラ・ロクロナラ 内: ヨコナラ・ハコ	灰 5.5/1	具 8/32	雨蓋カマド		
33	007-07	土器底	甕	S-6	S1110	16.0	-	-	灰: ヨコナラ 内: ヨコナラ・ハコ	灰:黄褐色 7.5VR 7/4	具 口縁底 3/32			
34	007-09	土器底	甕	S-6 レジンD 1-6	S1110	16.4	-	-	灰: ヨコナラ・ビオエキ・ハコ 内: ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/4	具 口縁底 6/32	土器D		
35	007-10	土器底	甕	レジンD 1-6	S1110	18.0	-	-	灰: ヨコナラ・ハコ 内: ヨコナラ・ハコ	灰 2.5VR 8/2	小中粗 具	口縁底 2/32 カット 上蓋		
36	007-08	瓦他器	瓶	S-6	S1110	11.0	-	-	灰: ヨコナラ・ロクロナラ 内: ヨコナラ	灰 7.5VR 7/1	具 口縁底 1/32	カット 下蓋		
37	008-01	瓦他器	瓶	T-7	S1110	12.6	3.6	-	灰: ヨコナラ・ハコ・ヘラコナラ 内: ヨコナラ	灰 N6/	具 1/32	No.1		
38	007-06	土器底	甕	S-9	S1112	15.2	-	-	灰: ヨコナラ・ハコ 内: ヨコナラ・ハコ	灰:黄褐色 10VR 7/4	具 口縁底 2/32			

第3表 遺物観察表(1)

番号 器皿 番号	実物 番号	種類	部類等	出土位置 グリッド	出土状況	計測値 (cm)	調整技術の推進		色調	鉢土	焼成	残存	備考		
							口径	底面 直径							
39 007-01	土器類	壺	S-9 S-7 S-10	S1112 ガラフン T-10	-	12.8	-	-	青:ヨコナダ+ハケ 内:ヨコナダ+ハケ+工具ナダ	に青:調節 10YR 7/4	黒	良	目録底 7/32	カマド周辺	
40 007-01	瓦器類	蓋	S-9 T-10	S1112 -灰	-	12.4	3.3	-	青:ヨコロダ+ハラオヨシ 内:ヨコロダ+ハラ	灰	N 6/-	黒	良	5/32	
41 007-01	瓦器類	底盤	S-9	S1112	-	-	-	-	青:ヨコロダ+ハラ	灰	N 5/0/1	黒	良	目録底 小片	
42 007-01	瓦器類	底盤	S-9	S1112	10.0	-	-	-	青:ヨコロダ+ハラオヨシ 内:ヨコロダ	灰	N 5/3/1	黒	良	目録底 3/32	
43 007-01	瓦器類	底盤	S-9	S1112	12.4	3.7	-	-	青:ヨコロダ+ハラオヨシ 内:ヨコロダ	灰	N 5/-	黒	良	2/32	
44 011-01	瓦器類	底盤	S-8	S1116	10.0	3.1	-	-	青:ヨコロダ+ロガタケヅリ 内:ヨコロダ	灰	N 5/6/1	黒	良	11/32	
45 009-01	土器類	小盤	Q-7	S1119	12.7	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ+ハケメ	に青:調節 10YR 7/4	中や粗 5/32	黒	目録底 2/32	外側スリット蓋	
46 010-01	土器類	壺	M-8 S-27 Q-8	S1119	14.0	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ+ハケメ	褐色黄 2.5Y 6/2	中や粗 (~1mm粒状)	黒	目録底 2/32		
47 009-02	土器類	壺	Q-7	S1119	19.1	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ	12.45-40 7.5Y 7/7.4	中や粗 (~2mm粒状)	黒	目録底 2/32	外側スリット蓋	
48 009-01	土器類	壺	H-8	S1119	16.7	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ+ハケメ	浅青灰 10YR 8/4	中や粗 (~3mm粒状)	黒	目録底 3/32	カマド周辺	
49 010-01	土器類	壺	Q-8	S1119	18.5	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ハラメ	に青:調節 10YR 7/3	中や粗 (~3mm粒状)	黒	目録底 3/32		
50 009-01	瓦器類	底盤	Q-7	S1119	12.8	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰	N 5/6/1	黒	目録底 2/32		
51 009-01	瓦器類	底盤	Q-8	S1119	11.7	-	-	-	青:ヨコロダ+ロガタケヅリ 内:ヨコロダ+ロガタケヅリ	灰	N 5/6/1	黒	目録底 1/32		
52 010-01	土器類	壺	K-7 H-8 N-8 Q-8	S1119	10.9	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ+ハケメ+ナダ	に青:調節 10YR 7/3	中や粗 (~1mm粒状)	黒	目録底 2/32		
53 010-01	土器類	壺	H-7 H-8 N-8 Q-8	S1119	18.8	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケメ 内:ヨコナダ+ハケメ	泥白 2.5Y 8/2	中や粗 (~2mm粒状)	黒	目録底 3/32	カマド周辺	
54 012-01	土器類	壺	H-7	S1215	17.2	-	-	-	青:ヨコナダ 内:ヨコナダ	に青:調節 10YR 7/3	黒	良	目録底 小片		
55 009-01	瓦器類	底盤	H-7 H-8	S1219 S1209	11.9	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ+一方向ナダ	灰 3.5Y 6/1	中や粗 (~2mm粒状)	良	4/32		
56 009-01	瓦器類	底盤	H-7	S1219 S1209	13.9	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ+木製調	泥白 3.5Y 8/2	中や粗 (~2mm粒状)	中や粗 本邦	目録底 4/32		
57 010-01	瓦器類	底盤	H-7	S1219	8.7	2.8	-	-	青:ヨコロダ+ロガタケヅリ 内:ヨコロダ	灰 N 5/-	中や粗 (~2mm粒状)	黒	11/32		
58 012-01	瓦器類	底盤	R-7 H-7	S1219	10.0	3.30	-	-	青:ヨコロダ+ロガタケヅリ+ハラオヨシ 内:ヨコロダ+ナダ	灰 N 6/-	黒	11/32	流路に「X」印		
59 015-01	土器類	瓶	S-8	S1211	-	10.5	-	10.5 内:ハラメ+ナダ+米調整 内:ナダ	灰 2.5Y 8/2 直面研磨 10YR 8/4	黒 直面研磨 10YR 8/4	黒	良 直面研 1/32 2次			
60 011-01	土器類	瓶	V-8	S1222	-	-	-	-	青:ヨコナダ 内:ヨコナダ	に青:調節 10YR 7/3	中や粗 本邦	目録底 小片			
61 011-01	土器類	壺	V-8 表上	S1222	29.8	-	-	-	青:ヨコナダ+ハケ 内:ナダ	に青:調節 1.5Y 7/4	中や粗 本邦	目録底 4/32			
62 013-01	瓦器類	底盤	V-8	S1222	-	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	泥白 3.5Y 6/	黒	3/32			
63 011-01	土器類	壺	U-4	S1214	10.2	-	-	-	青:ヨコナダ 内:ヨコロダ+ナダ 内:ヨコロダ	に青:調節 10YR 7/4	黒	目録底 1/32			
64 012-01	瓦器類	高杯	V-7	S1214	-	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ+ナダ	直面 2.5Y 4/1	黒	良 直面研 4/32			
65 012-01	瓦器類	高杯	H-8	S1218	11.6	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰 N 5/-	黒	目録底 3/32			
66 012-01	瓦器類	高杯	S-10	S1222	11.8	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰 3.5Y 6/3	黒	目録底 3/32			
67 011-01	瓦器類	高杯	Q-8	S1220	-	8.0	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	泥白 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	中や粗 直面研 1/32 小片	不規 1/32			
68 011-01	瓦器類	平底盤	Q-8	S1220	11.6	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰 N 6/-	黒	目録底 3/32			
69 011-01	瓦器類	高杯	S-8	S1224	-	-	10.8	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰 N 6/-	黒	良 直面研 3/32			
70 011-01	瓦器類	高杯	T-5	包含層	10.9	-	-	-	青:ヨコロダ+ロガタケヅリ 内:ヨコロダ	灰 N 6/-	黒	目録底 3/32			
71 012-01	瓦器類	底盤	-	土上	-	-	-	-	青:ヨコロダ 内:ヨコロダ	灰 N 6/-	黒	良 直面研 小片			
72 011-01	陶器	底盤	底	-	土上	12.9	-	-	青:ヨコロダ+灰 内:ヨコロダ+灰	灰 灰白 2.5Y 7/2	黒 灰白 2.5Y 7/2	黒	目録底 3/32		
73 011-01	陶器	小皿	一次調査	トレーシ-9	9.4	2.4	-	-	青:ヨコロダ+ホウカイ 内:ヨコロダ+自然鐵	灰 2.5Y 7/1	中や粗 本邦	目録底 4/32			
74 013-01	陶器	山系瓶	一次調査	トレーシ-4	-	7.7	-	-	青:ヨコロダ+ヨコナダ+ハラ 内:ヨコロダ+内面研磨+施いヨコナダ	泥白 2.5Y 8/1	黒 2.5Y 7/1	黒	直面研 5/32		
75 013-02	陶器	山系瓶	一次調査	トレーシ-4	13.8	5.0	8.2	-	青:ヨコロダ+ヨコナダ+施いトナカイ 内:ヨコロダ+内面研磨+自然鐵	灰 2.5Y 8/1 2.5Y 6/3	黒 オーラー 2.5Y 6/2 2.5Y 6/2	黒 直面研 3/32	西台モガサ佐 直面研		
76 011-01	陶器	天井茶碗	K-6	S1214	10.8	6.1	5.2	-	青:直面研 内:直面研	泥白 2.5Y 8/1 10YR 4/3	黒	直面研 3/32			

第4表 遺物観察表（2）

V 自然科学分析

1 はじめに

三重県三重郡菰野町に位置する棕ノ木遺跡（第2次）で採取された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。目的は、採取試料の時期の測定である。

2 試料と方法

試料は、SK11壁面で採取された黒褐色土層の土壤（¹⁴CサンプルNo. 1 : PLD-29805）、T1で地表面からマイナス25～35cmから採取された黒褐色土層の土壤（¹⁴CサンプルNo. 2 : PLD-29806）、T2で地表面からマイナス135～145cmから採取された黒褐色土層の土壤（¹⁴CサンプルNo. 3 : PLD-29807）、T2で地表面からマイナス25～35cmから採取された黄灰の土壤（¹⁴CサンプルNo. 4 : PLD-29808）の、4点である。

遺構検出面であるオリーブ褐色極細粒砂層の直下に広がる黒褐色土層（¹⁴CサンプルNo. 1、¹⁴CサンプルNo. 3）と、その約1m下に広がる黒褐色土層（¹⁴CサンプルNo. 2、¹⁴CサンプルNo. 4）の堆積年代を求めるのが目的である。発掘調査所見によれば、上面の黒褐色土層は弥生時代中期、下面の黒褐色土層は縄文時代後期の堆積層と考えられている。いずれも土壤試料であるため、ヒューミンを対象として測定を行った。測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS : NEC製 I, 5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3 結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第15図に曆年較正結果をそれぞれ示す。

曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yr BP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正には0xCal14.2（較正曲線データ : IntCal13）を使用した。なお、1σ曆年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に2σ曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4 考察

以下、2σ曆年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

遺構検出面であるオリーブ褐色極細粒砂層の直下の黒褐色土層は、¹⁴CサンプルNo. 1（PLD-29805）が2577-2489 cal BC (95.4%)で紀元前2580～2480年頃、¹⁴CサンプルNo. 3（PLD-29807）が2865-2804 cal BC (27.2%)、2761-2617 cal BC (64.1%)、2610-2582 cal BC (4.1%)で紀元前2870～2580年頃の曆年代を示した。綿瀬・高橋（2008）を参照すると、これらは縄文時代中期後半のなかでも新しい方

の年代に相当する。

遺構検出面直下の黒褐色土層の約1m下の黒褐色土層は、¹⁴CサンプルNo. 2 (P L D-29806) が3328-3219 cal BC (29.7%)、3176-3159 cal BC (2.3%)、3122-3015 cal BC (63.4%)で紀元前3330～3010年頃、¹⁴CサンプルNo. 4 (P L D-29808) が3020-2907 cal BC (95.4%)で紀元前3020～2900年頃の曆年代を示した。繩編・高橋(2008)を参照すると、これらは縄文時代中期後半のなかでも古い方の年代に相当する。

発掘調査所見では上面の黒褐色土層は弥生時代中期、下面の黒褐色土層は縄文時代後期の堆積層と考えられていたが、測定結果はいずれも縄文時代中期後半に相当する曆年代を示した。

バレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林統一・Zaur Lomtatidze・小林克也

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Knauf, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

【引用・参考文献】

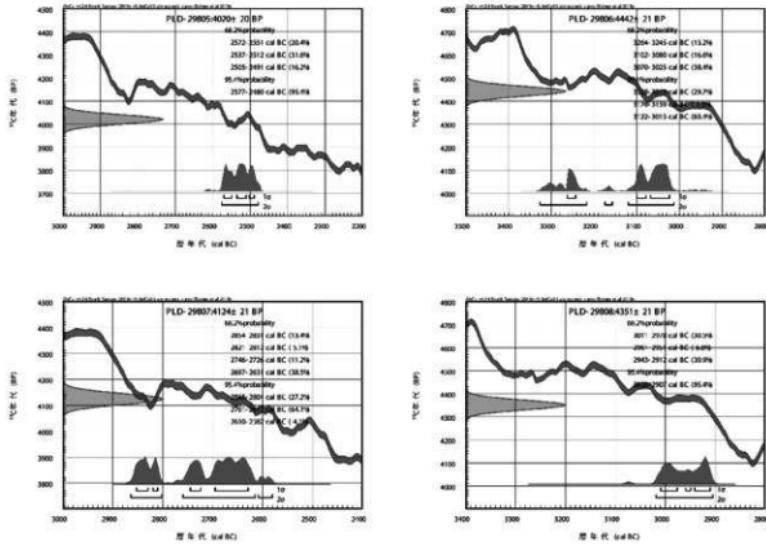
繩編 茂・高橋健太郎 (2008) 中富式・明神式土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 494-501. アム・プロモーション.

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
P L D-29805	グリッド: S 8 位置: SK11壁面 層位: 黒褐色土層 標高: 地表面から マイナス25～35cm 遺物No. ¹⁴ CサンプルNo. 1	種類: 土壌 (ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
P L D-29806	グリッド: Q 6 位置: T 1 層位: 黒褐色土層 標高: 地表面から マイナス25～35cm 遺物No. ¹⁴ CサンプルNo. 2	種類: 土壌 (ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
P L D-29807	グリッド: S 5 位置: T 2 層位: 黒褐色土層 標高: 地表面から マイナス35～145cm 遺物No. ¹⁴ CサンプルNo. 3	種類: 土壌 (ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
P L D-29808	グリッド: S 5 位置: T 2 層位: 黄灰シルト層 標高: 地表面から マイナス25～35cm 遺物No. ¹⁴ CサンプルNo. 4	種類: 土壌 (ヒューミン) 状態: dry	湿式篩分: 106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

第5表 測定資料および処理

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	“ ${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
P L D-29805 SK11裏面 “ ${}^{\text{14}}\text{C}$ サンプルNo. 1	-27.30 \pm 0.17	4020 \pm 20	4020 \pm 20	2572-2551 cal BC (20.4%) 2537-2512 cal BC (31.6%) 2505-2491 cal BC (16.2%)	2577-2480 cal BC (95.4%)
P L D-29806 T 1 地表面から マイナス25~35cm “ ${}^{\text{14}}\text{C}$ サンプルNo. 2	-25.70 \pm 0.15	4442 \pm 21	4440 \pm 20	3264-3245 cal BC (13.2%) 3102-3080 cal BC (16.6%) 3070-3025 cal BC (38.4%)	3328-3219 cal BC (29.7%) 3176-3159 cal BC (2.3%) 3122-3015 cal BC (63.4%)
P L D-29807 T 2 地表面から マイナス135~145cm “ ${}^{\text{14}}\text{C}$ サンプルNo. 3	-27.36 \pm 0.15	4124 \pm 21	4125 \pm 20	2854-2831 cal BC (13.4%) 2821-2812 cal BC (5.1%) 2746-2726 cal BC (11.2%) 2697-2631 cal BC (38.5%)	2865-2804 cal BC (27.2%) 2761-2617 cal BC (64.1%) 2610-2582 cal BC (4.1%)
P L D-29808 T 2 地表面から マイナス25~25cm “ ${}^{\text{14}}\text{C}$ サンプルNo. 4	-26.62 \pm 0.13	4351 \pm 21	4350 \pm 20	3011-2978 cal BC (30.5%) 2961-2951 cal BC (6.8%) 2943-2912 cal BC (30.9%)	3020-2907 cal BC (95.4%)

第6表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果



第15図 曆年較正結果

VI 結語

1 壺穴住居

今回、調査面積は791m²と狭小であるが、6世紀末葉から7世紀中葉の飛鳥時代の壺穴住居を5棟確認することができた。まずこの壺穴住居について、まとめておきたい。

平面プラン 壺穴住居は5棟中3棟が重複しているが、平面形は隅丸方形ないしは方形である。

カマドと煙道 すべての住居で、カマドを検出できた。S H 1では南隅と北辺、S H 10・12では西辺、S H 16では東辺、S H 19では南東辺に取り付けられている。

また、煙道は、カマドからほぼ一直線に掘削されている。S H 1では、煙道が2個所あり、カマドが造り替えられた可能性がある。県内においてカマドの造り替えが明確に判明した例は、非常に少なく、津市美杉町所在の下之川富田遺跡³や松阪市嬉野宮古町所在の天宝寺山遺跡⁴において確認されているだけである。

なお、北辺の煙道から土師器長胴甕が出土しており、口縁部と底部が欠損しているため、土管状に使用された可能性がある。

主柱穴 S H 1・10・12において4つ確認している。規模は、直径10~20cm、深さ10~20cmを測る。県内の壺穴住居は、この時期、主柱穴が4つ確認されるが、これ以降、主柱穴が確認されなくなる傾向があり、住居の建築構造に変化があったとみられている⁵。

貯蔵穴 S H 1ではカマド脇にS K 9が、S H 19ではS K 25を確認している。この土坑からは、多くの土器が出土している。

最後に壺穴住居5棟の性格について考えてみたい。この地域は、東流する朝明川、海藏川、竹谷川、三瀧川などの河川によって挟まれており、広範囲に扇状地を確認することができる。第16図をみてみると、当遺跡の東側で緩やかに弧を描く道が走っており、まさに扇状地の地形が浮かび上がってみえる。

扇状地は、住環境には適しているが、水田耕作に

は適さないため、高度な灌漑用水の技術が必要であるとされており、当遺跡はこの扇状地の中でも河川沿いの微高地に集落が形成されている。

また、周辺の遺跡には当遺跡から北方向3.9kmに奈良時代の六谷遺跡⁶が、北北西方向3.9kmに飛鳥時代から奈良時代の下江平遺跡⁷が所在している。六谷遺跡では、大型壠立建物とみられる壺穴住居S B 3が、下江平遺跡でも同様の壺穴住居S B 45・106が確認されており、渡来系集団との関わりが指摘されている。

さらに、北西方向2.1kmに奥郷浦古墳群⁸が存在している。この古墳群からの出土品にはミニチュアの炊飯具である土器器座と把手付鍋があり、被葬者は渡来系の人物の可能性を考えられている。

なお、『日本書紀』応神天皇三十一年条⁹に北勢地域には、猪名部氏が船大工として新羅王から献上されたと記されている。

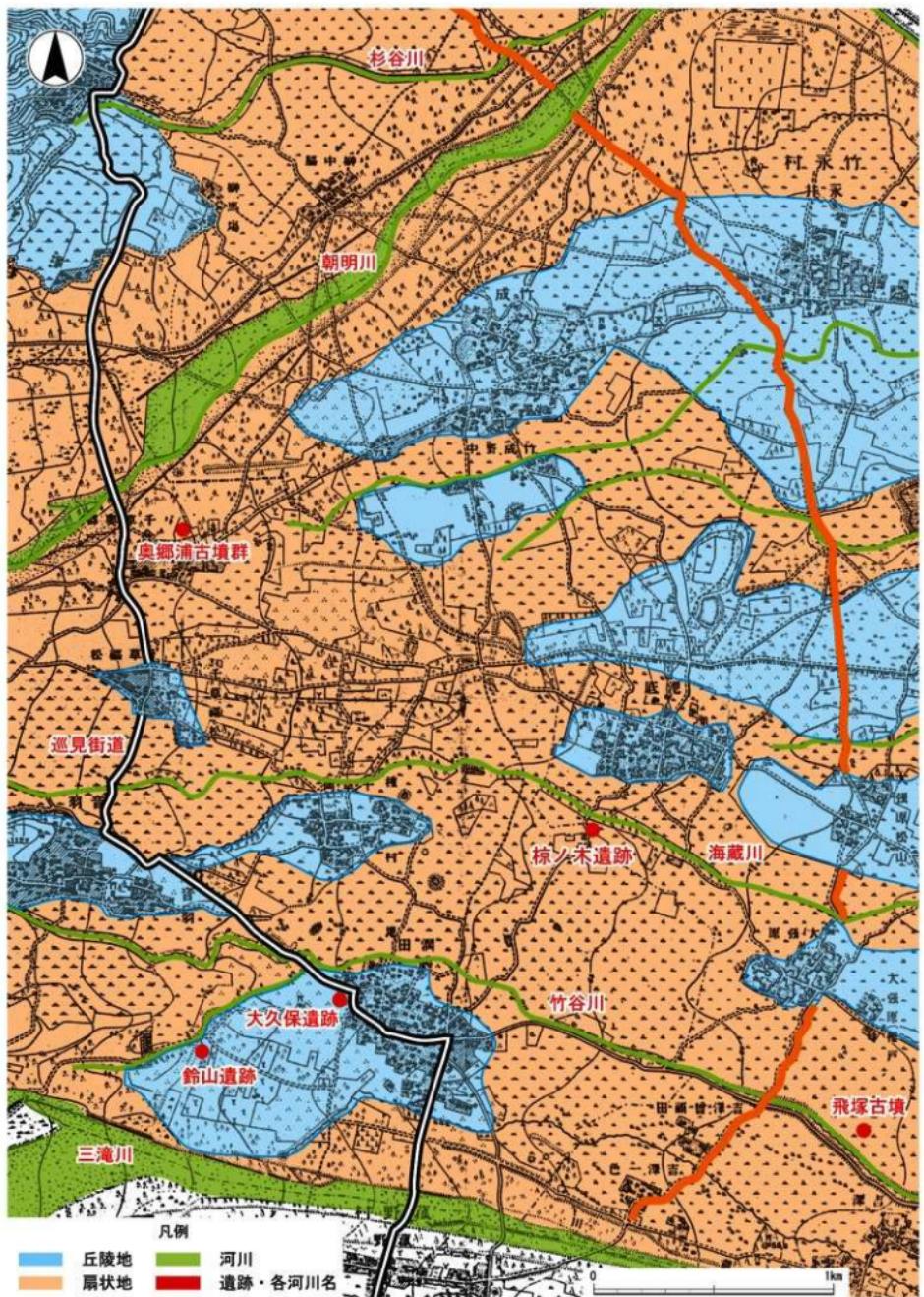
こうした遺跡周辺の環境や近域の遺跡の発掘調査の成果や出土品・文献上の記録から推測すると、この地域は高度な土木技術を持った渡来系の人々によつて開拓されていった可能性も考えられる。当遺跡に住んだ人々は、その開拓に関わったのかもしれない。

2 「×」記号のある土師器甕

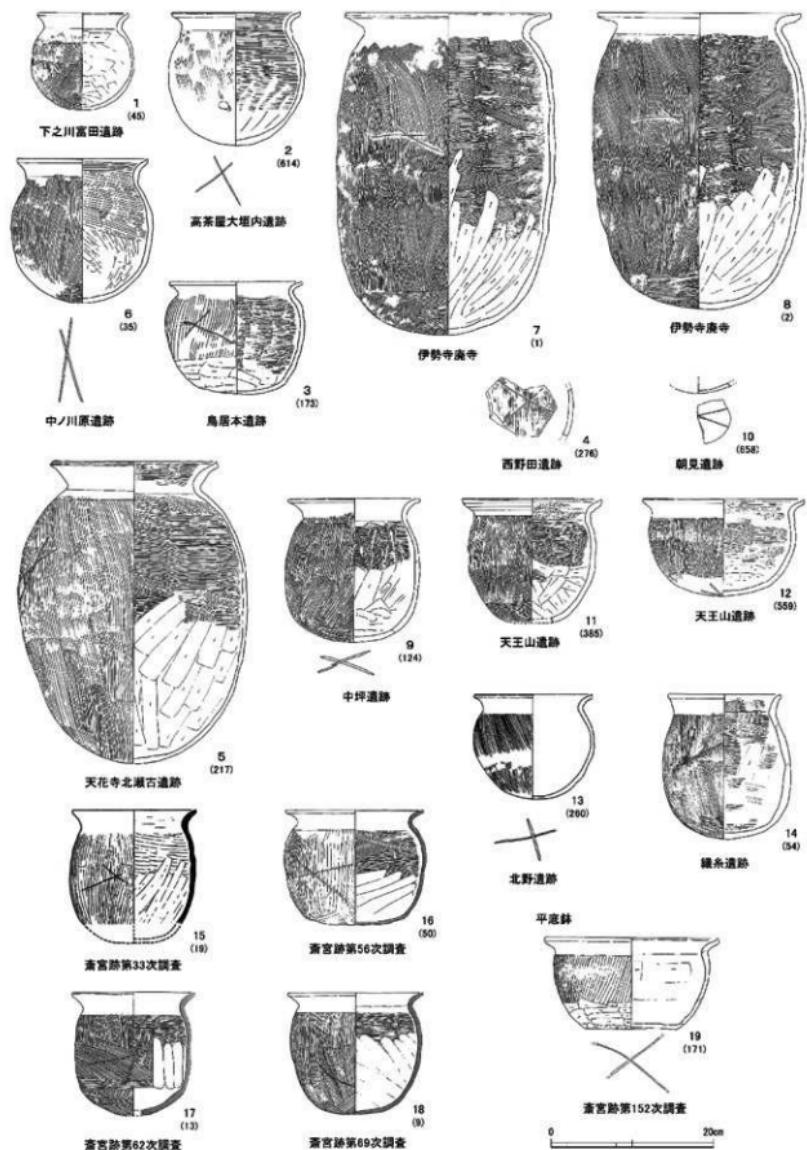
S H 1において1点（報告番号21）、土師器甕の体部にヘラによる「×」記号のあるものを確認した。このような土師器甕にヘラ書きによる記号のあるものについては、管見の限りで三重県内の13遺跡19例あり、以下に紹介する。

下之川富田遺跡¹⁰ 津市美杉町所在の遺跡で、壺穴住居S H 15から体部に記されたものが出土している（報告番号45）。壺穴住居の時期は飛鳥時代前半とみられる。この地域でこの時期の集落は、雲出川下流域に存在した川口閑と関連するとみられる。

高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）¹¹ 津市城山所在の遺跡で、壺穴住居S H 116から底部に記されたものが出土している（報告番号614）。壺穴住居の時期は飛鳥時代から奈良時代前半とみられる。この遺跡で



第16図 桦ノ木遺跡周辺地形図（大日本帝国陸地測量部の測量図(明治43年)を改変 1 : 20,000）治水地形分類を基に作成



第17図 「×」記号のある土師器壺・平底鉢 ※()内数字は報告書掲載番号

は、大型の掘立柱建物が確認されており、神殿の可能性も考えられている。

鳥居本遺跡（第3次）⁶ 津市一志町所在の遺跡で、井戸 S E 105から体部に記されたものが出土している（報告番号173）。井戸祭祀に伴うものと考えられる。鳥居本遺跡の近域には後述する天華寺北瀬古遺跡⁷や、飛鳥・奈良時代の遺跡である天華寺庭寺⁸・堀田遺跡⁹・平生遺跡¹⁰・片野遺跡¹¹が存在している。これらの遺跡は、出土遺物から畿内との関係性が非常に高いと考えられている。

西野田遺跡（第1・2・3次）¹² 松阪市嬉野下ノ庄町所在の遺跡で、土坑 S K93から体部に記されたものが出土している（報告番号276）。奈良時代の遺構と考えられている。この遺跡は中村川流域の飛鳥時代から奈良時代の各遺跡と関係があると考えられており、一志郡衙や持統天皇をはじめとした聖武天皇の行幸や斎王群行といった歴史的事実と関わりが深い可能性がある。

天華寺北瀬古遺跡（第1次）¹³ 松阪市嬉野宮古町所在の遺跡で、自然流路 S R 1から体部に記されたものが出土している（報告番号217）。この遺構からは古墳時代の土器なども出土しているが、飛鳥時代においても流路としての機能があったとみられる。

中ノ川原遺跡（第2次）¹⁴ 松阪市八重田町所在の遺跡で、東旧河道から底部に記されたものが出土している（報告番号35）。この河道は、鎌倉時代まで機能していたと考えられるが、土器自体は奈良時代のものと考えられる。墨書き土器などが投棄されており、河川祭祀の可能性もある。

伊勢寺魔寺¹⁵ 松阪市伊勢寺町所在の遺跡で、土器棺墓 S X13から2点、体部に記されたものが出土している（報告番号1・2）。平安時代初頭から中期と考えられている。

中坪遺跡（第1次）¹⁶ 松阪市立田町所在の遺跡で、井戸 S E 75から底部に記されたものが出土している（報告番号124）。この井戸底から土師器甕や須恵器長頸甕がまとめて出土しており、井戸祭祀に関わる一括資料と考えられる。遺物の時期は、奈良時代（睿宗編年 I 期2～3段階）とみられる。

朝見遺跡（第1・2次）¹⁷ 松阪市和屋町所在の遺跡で、溝 S D47から底部に記されたものが出土してい

る（報告番号658）。底部片で全体が分からぬが奈良時代の可能性がある。また、溝からは縁袖陶器をはじめとして多くの土器が出土している。

天王山遺跡¹⁸ 松阪市豊原町所在の遺跡で、堅穴住居 S H306及び土坑 S K303から体部と底部に記されたものが出土している（報告番号385・559）。共に遺物の時期は、7世紀後葉から8世紀初頭にかけてのものである。この遺跡は、官道伊勢道や飯野郡との関わりを持つ集落跡と考えられているが7世紀代に発展し、その後8世紀には廃絶している。時期差はあるとしても桙ノ木遺跡と同様に集落として次の時代に続かないという共通した側面を有している。

北野遺跡（第3次）¹⁹ 多気郡明和町所在の遺跡で、土坑 S K3170から底部に記されたものが出土している（報告番号260）。この土坑は、土器が多く出土した遺構で、遺物の時期は、7世紀代と考えられている。北野遺跡は、県内有数の上器器生産の拠点遺跡で堀田遺跡²⁰や水池土器製作遺跡²¹と並ぶものである。

織糸遺跡²² 多気郡明和町所在の遺跡で、堅穴住居 S H14から体部に記されたものが出土している（報告番号54）。遺物の時期は、古墳時代後期と考えられている。この地域は古代の多気郡に属しており、同時期の掘立柱建物も確認されており、斎宮とは別に多気郡に関わる施設があった可能性も考えられる。

斎宮跡²³ 多気郡明和町所在の国史跡の遺跡である。第33・56・62・69次調査において全て体部に記されたものが出土している（各報告番号19・50・13・9）。第152次調査のものは底部に記されたものである（報告番号171）。

第33次調査の遺物は、井戸 S E 1800の最上層から出土しており、奈良時代のものと考えられている。第56次調査の遺物は、堅穴住居 S B 3590からの出土しており、8世紀後半のものと考えられている。この堅穴住居は平面形が長方形で、北壁中央部にカマドを構築しており、白色粘土で貼り床がされている。第56次調査では、この時期唯一の堅穴住居である。

第62次調査の遺物は、土坑 S K4130から出土しており、奈良時代後期と考えられている。この土坑は一边が約3mの方形で、埋土中には多くの焼土が含まれている。建物の可能性も考えられる。

第69次調査の遺物は、土坑 S K 4585から出土しており、奈良時代後期と考えられている。この土坑は径 1～2 m の円形で、掘立柱建物 S B 4588の北西隅に位置しており、建物に関わる遺物とも考えることもできよう。

第152次調査の遺物は、平底鉢である。土坑 S K 9785から出土しており、奈良時代末期から平安時代初頭（斎宮編年 II 期 1段階）と考えられている。この土坑は約 3 m の略円形で、壁面がほぼ垂直に掘削されており、井戸の可能性がある。埋土中からは、多くの土器が出土している。

さて、これらの出土例から「×」記号のある土師器甕は、南勢地域に偏っていることが判明した。この偏りから土師器の生産などと何らかの関わりも想定される。

最後に、この「×」記号の意味について考えてみたい。全国各地の遺跡の各時代から出土する遺物のなかに「×」記号を有するものがある。須恵器で見られる「×」記号については、生産の単位や生産者の区別などと考えられている⁶。この土師器甕の場合も同じような意味があるのかもしれない。

なお、下江平遺跡⁸出土の土師器杯には直列にヘラ書きの「×」記号と「財」の文字が墨書きされたものがあり、興味深い。今後、県内外での出土例の増加も視野に入れて検討をさらに深めていきたい。

3 小結

椋ノ木遺跡では、堅穴住居 5 棟、土坑 1 基が確認された。集落の存続時期は、6世紀末葉から 7世紀中葉と短期間である。

遺跡の存続期間については、大和の中央政権において渡来系の人々と繋がりの深い蘇我氏から天皇を中心の政権に変化している時期と重なる点が重要視できるのではなかろうか。この中央政権での変化に応じて、渡来人と関係性のあるこの地域も時の流れに飲み込まれたのかも知れない。

そして、当遺跡がこの地域の扇状地を開拓していくための集落であったとみられ、この時期の集落の有様の一端を解明できたのではなかろうか。（萩原）

【註】

- ①三重県埋蔵文化財センター『下之川富田』(1998年)
- ②一志町教育委員会『天花寺山』(1991年)
- ③安藤政雄他『住まいの考古学』(学生社 2007年)
- ④三重県教育委員会「六谷遺跡」『昭和58年度県営は場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(1984年)
- ⑤菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告 I』(1987年)
- ⑥菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告 II』(1988年)
- ⑦新田洋・野原宏司「奥郷浦古墳群について」『こもの文化財だより』創刊号(菰野町教育委員会 1987年)
- ⑧宇治谷孟訳『日本書記』上(講談社学術文庫 1988年)
- ⑨⑩同じ
- ⑪三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大塙内遺跡(第3・4次)』発掘調査報告(1998年)
- ⑫一志町教育委員会『鳥居本遺跡発掘調査報告』(1975年)
- 一志町教育委員会『鳥居本遺跡第三次調査報告』(1992年)
- ⑬三重県埋蔵文化財センター『天花寺北瀬古遺跡(第1次)』発掘調査報告(1999年)
- ⑭三重県教育委員会『天華寺廃寺』『昭和54年度県営は場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(1980年)
- 三重県教育委員会『天花寺廃寺』『昭和55年度県営は場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』(1981年)
- ⑯三重県埋蔵文化財センター『堀田遺跡(第3～5次)』発掘調査報告(2002年)
- 三重県埋蔵文化財センター『堀田遺跡(第6次)』発掘調査報告(2005年)
- ⑰平生遺跡調査団『平生遺跡発掘調査報告』(1976年)
- 三重県埋蔵文化財センター『平生遺跡発掘調査報告』(1994年)
- ⑲一志町教育委員会『片野遺跡IV』(2002年)
- ⑳三重県埋蔵文化財センター『西野田遺跡(第1・2・3次)』発掘調査報告(2009年)
- ㉑㉒同じ
- ㉓三重県埋蔵文化財センター『中ノ川原遺跡(第2次)』発掘調査報告(1998年)
- ㉔三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』(1990年)

No.	遺跡名	所在地	報告番号	出土遺構	時期	備考
1	下之川富田遺跡	津市美杉町	45	堅穴住居S H15	陶邑編年TK217型式・飛鳥時代前半	体部
2	高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)	津市城山	614	堅穴住居S H116	飛鳥時代から奈良時代前半	底部
3	鳥居本遺跡(第3次)	津市一志町	173	井戸S E105	奈良時代	体部
4	西野田遺跡(第1・2・3次)	松阪市庭野下ノ庄町	276	土坑S K93	奈良時代	体部
5	天花寺北瀬古遺跡(第1次)	松阪市嬉野宮古町	217	自然流路S R 1	飛鳥時代	体部
6	中ノ川原遺跡(第2次)	松阪市八重田町	35	東畠河道	奈良時代	底部
7	伊勢寺廐寺	松阪市伊勢寺町	1	土器棺S X13	平安時代初頭から中期	体部
8	伊勢寺廐寺	松阪市伊勢寺町	2	土器棺S X13	平安時代初頭から中期	体部
9	中坪遺跡(第1次)	松阪市立田町	124	井戸S E75	奈良時代(斎宮編年I期2から3段階)	底部
10	朝見遺跡(第1・2次)	松阪市和屋町	658	溝S D47	奈良時代?	底部
11	天王山遺跡	松阪市豊原町	385	堅穴住居S H306	7世紀後葉から8世紀初頭	体部
12	天王山遺跡	松阪市豊原町	559	土坑S K303	7世紀後葉から8世紀初頭	底部
13	北野遺跡(第3次)	多気郡明和町	260	土坑S K3170	7世紀代	底部
14	織糸遺跡	多気郡明和町	54	堅穴住居S H14	古墳時代後期	体部
15	斎宮跡(第33次調査)	多気郡明和町	19	井戸S E1800	奈良時代	体部
16	斎宮跡(第56次調査)	多気郡明和町	50	堅穴住居S B3590	8世紀後半	体部
17	斎宮跡(第62次調査)	多気郡明和町	13	土坑S K4130	奈良時代後期	体部
18	斎宮跡(第69次調査)	多気郡明和町	9	土坑S K4585	奈良時代後期	体部
19	斎宮跡(第152次調査)	多気郡明和町	171	土坑S K9785	奈良時代末期から平安時代初頭(斎宮編年II期1段階)	底部 平底鉢

第7表 「×」記号のある土器器壺・平底鉢出土遺跡一覧表

- ⑨三重県埋蔵文化財センター『中坪遺跡(第1次)発掘調査報告』(2016年)
- ⑩三重県埋蔵文化財センター『朝見遺跡(第1・2次)発掘調査報告』(2014年)
- ⑪三重県埋蔵文化財センター『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』(2006年)
- ⑫三重県埋蔵文化財センター『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告』(1995年)
- ⑬三重県埋蔵文化財センター『堀田遺跡』『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1981年)
- ⑭三重県教育委員会「堀田遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1981年)
- ⑮明和町「水池土器製作遺跡」『明和町史』資料編第1巻(2004年)
- 明和町教育委員会・三重県教育委員会「水池土器製作遺跡」『斎王宮跡』(1977年)
- ⑯三重県埋蔵文化財センター『織糸遺跡』(2006年)

- ⑰三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『IV第33次調査』『史跡斎宮跡発掘調査概報』(1980年)
- 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『IV第56次調査』『史跡斎宮跡発掘調査概報』(1984年)
- 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『V第62次調査』『史跡斎宮跡発掘調査概報』(1985年)
- 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所『VI第69次調査』『史跡斎宮跡発掘調査概報』(1986年)
- 斎宮歴史博物館『II第152次調査』『史跡斎宮跡平成19年度発掘調査概報』(2009年)
- ⑲中村哲「須恵器生産に関する一試考－和泉陶邑窯における陶工組織について－」『考古学雑誌』第63巻第1号(日本考古学会 1977年)
- ⑳⑯に同じ

写 真 図 版



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



調査区全景（真上から）



竪穴住居群（東から）



S H 1 (北から)



S H 1 突出部遺物出土状況 (南から)



S H 1 カマド (北から)



S H 1 カマド遺物出土状況 (北から)



S H10 (東から)



S H10カマド (東から)



S H12 (東から)



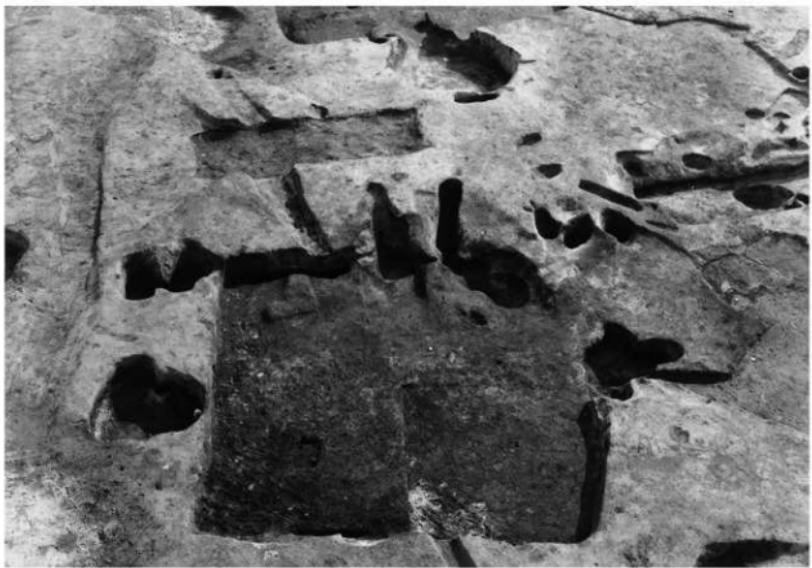
S H12カマド (東から)



S H16 (南から)



S H16カマド (南から)



S H19 (西から)



S H19カマド (西から)



SK 25遺物出土状況（西から）



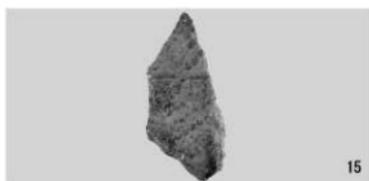
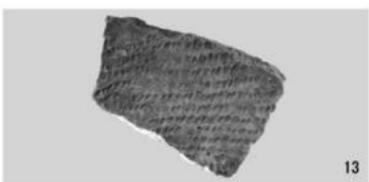
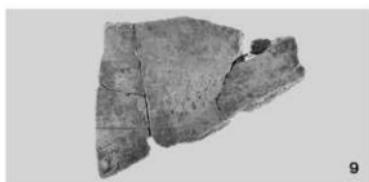
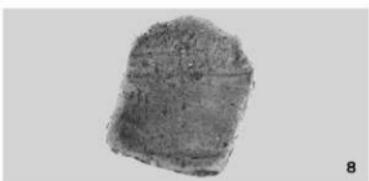
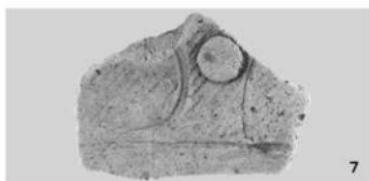
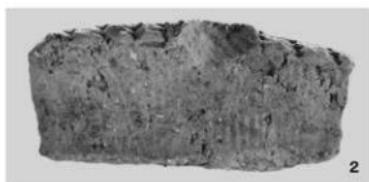
SD 4（西から）



SD 4（北から）



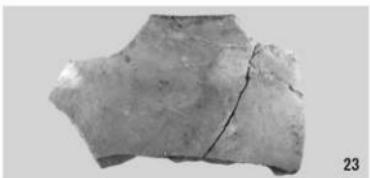
SD 21・SD 23（東から）



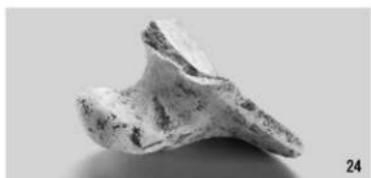
出土遺物（1）



22



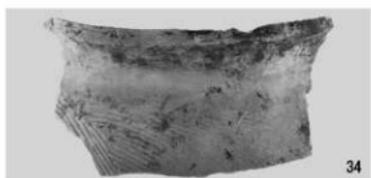
23



24



31



34



37



40



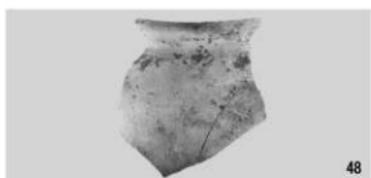
44



45



47

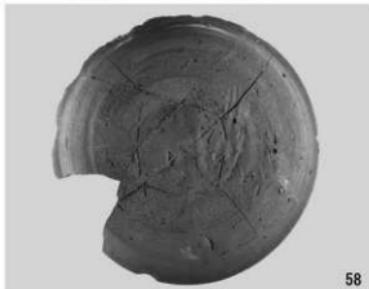
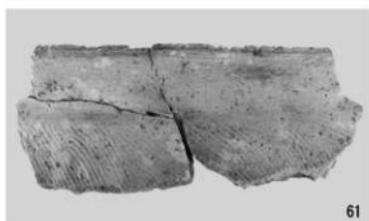
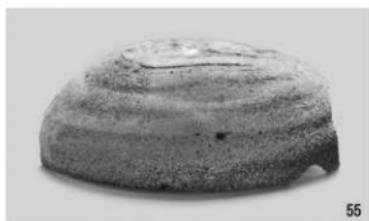


48



49

出土遺物（2）



出土遺物（3）

報告書抄録

ふりがな	むくのきいせき（だいにじ）はくつちょうさほうこく							
書名	棕ノ木遺跡（第2次）発掘調査報告							
副書名								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-10							
編著者名	泉賢治・萩原義彦・服部芳人							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2019（令和元）年9月2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
むくのきいせき 棕ノ木遺跡	三重県 三重郡 濱野町 おおあわいそご 大字池底 おおあわいたる 大字潤田	24341	135	35° 01' 53"	136° 31' 11"	20141016 ～ 20150113	791m ²	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT～ 龜山西JCT) 建設事業
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
棕ノ木遺跡	集落跡	飛鳥	堅穴住居5棟 土坑1基等	土師器・須恵器				
要旨	発掘調査の結果、堅穴住居5棟及び土坑1基を確認した。これらの遺構の時期は飛鳥時代と考えられ、それぞれの遺構から土師器及び須恵器が出土している。この集落は、朝明川と三滝川に挟まれた扇状地の地域を開拓するために形成された可能性も考えられる。こうした集落跡は浜野町内において、確認されたのは初めてであり、この時期の集落の変遷を考えるうえで貴重な成果である。							

三重県埋蔵文化財調査報告323-10
椋ノ木遺跡（第2次）発掘調査報告

発行年月 2019（令和元）年9月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共立印刷株式会社